

## 1. はじめに

岐阜県は、日本列島の中でも活断層が比較的多く分布する地域のひとつであり、県内における直下型地震の頻度は高い。1891年に起きた濃尾地震はその典型であり、根尾谷断層をはじめとするいくつかの活断層（濃尾活断層系）によって引き起こされた。

活断層は、過去に直下型地震を起こした断層であるとともに、将来もまた地震を起こし得るものである。大地震の際に活動した痕跡は地形に表れているため、それを探ることによって、大半の活断層を見出すことができる。

活断層の分布は、「新編日本の活断層」（東京大学出版会）や「1:25,000 都市圏活断層図」（国土地理院）等により示されてきたが、岐阜県内の全域を網羅する詳細な地図は刊行されていなかった。

近年、東海・東南海・南海地震等の海溝型地震や、その前後に集中的に発生する直下型地震が迫っていると言われている。このような状況の中で、活断層の存在を正しく知り、直下型地震に備えることも重要である。このため、本県は、名古屋大学および他大学の研究者と共同で、「1:25,000 岐阜県活断層図」を作成した。本書はその解説書である。

活断層があるからと言って、すぐに危険ということはない。しかし、大地震がいずれそこで起きる可能性を示唆していることから、防災意識を高め、日常的な備えを充実させることが必要である。「1:25,000 岐阜県活断層図」および本書をその一助として活用していただきたい。

## 2. 作成方法

1:25,000 岐阜県活断層図は、県下全域の空中写真を詳細に判読することにより、活断層の活動に伴って形成された断層変位地形を見出す

変動地形学的手法により作成されたものである。空中写真としては、主に国土地理院撮影の縮尺約4万分の1空中写真（約1200枚）および約2万分の1空中写真（約500枚）、旧林野庁撮影の縮尺約2万分の1空中写真（約3200枚）の他、一部の地域については1万分の1の空中写真を使用した。また、活断層認定にあたっては、既存資料により提示されているトレンチ調査結果や地表地質調査結果も参考にした。

変動地形学は当該地域の地形の成り立ち（発達史）を検討することにより、断層運動以外の原因では形成され得ない特有な地形（断層変位地形）を見出す。これにより活断層の存否が判断される。判断の確定度に応じ、活断層（確実に断定されるもの）と推定活断層を認定した。

活断層や推定活断層などは国土地理院発行 1:25,000 都市圏活断層図等を踏襲して図1のように定義し、活断層については位置の確定度に応じて別々の表現としたほか、活撓曲（比較的ブロードな変形）や活褶曲（活背斜・活向斜）、地形面の傾動などの表現も使用した。

認定に際しては、岐阜県域活断層に関する既存の活断層図を縮尺1:50,000地形図にコンパイルし、既存資料における認定根拠を再検討し、新たな知見を付け加えて再吟味を行った。既存の活断層図と1:25,000岐阜県活断層図の活断層認定に関する相違点とその根拠は次章に記載する。なお、既存の資料としては以下のものがある：「新編日本の活断層」（活断層研究会編、1991）、「1:25,000都市圏活断層図」（鈴木ほか、1996a、b、c；岡田ほか、2003；鈴木ほか、2004、2005；池田ほか、2006；岡田ほか、2006a、b；中田ほか、2006；池田ほか、2007；岡田ほか、2008；堤ほか、2008；八木ほか、2008）、「近畿の活断層」（岡田・東郷編、2000）、「第四紀逆断層アトラス」（池田ほか編、2002）、「活断層詳細デジタルマップ」（中田・今泉編、2002）。

トレンチ調査地点と活断層露頭については、必ずしもすべてを掲載

し切れていないが、認定根拠としても重要であるため、認定判断の根拠となったものを中心に掲載した。そのほか、村松ほか（2002）を

## 記号 Legend











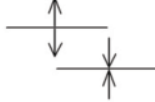


活断層 Active Fault		低断層崖や撓曲崖、屈曲した谷などの断層変位地形、もしくは断層露頭の存在により、最近数十万年間に繰り返し活動したことが確実に認定される断層。そのうち位置が特定できるもの。
活断層(位置やや不明確) Active Fault (site indistinct)		上述の根拠により活断層であることは確実であるが、浸蝕・堆積作用や人工改変などの影響により、その位置がやや不確実なもの。
活断層(活撓曲) Active Flexure		活断層のうち、軟らかい地層内で変位が拡散するなどして、地表面には段差でなくたわみとして現れたもの。たわみの範囲および傾斜方向を示す。
活断層(伏在部) Active Fault (concealed)		活断層のうち、浸蝕・堆積作用や人工改変などの影響により、その直接的な変位の痕跡が地形に残存しないもの。
横ずれ Strike Slip		活断層に沿う地盤の水平方向の移動の向き。移動の向きを矢印で示す。
縦ずれ Dip Slip		活断層に沿う地盤の鉛直方向の移動の向き。相対的に低下している側にケバを付す。
トレンチ調査地点 Trench Survey Site		断層の存在や活動履歴を明らかにするために調査溝(トレンチ)を掘削した地点。
活断層露頭 Active Fault Exposure		最近数十万年間の地層に断層変位が確認され、活断層であることが確実に判明した地点。現在は消失している場合もある。
地震断層 Earthquake Fault		歴史地震の際に地表地震断層が出現した区間。
活断層の名称 Names of Active Fault	阿寺断層(例)	活断層の固有名称。
推定活断層(地表) Presumed Active Fault		最近数十万年に繰り返し活動したことが地形学的に推定される断層(活断層の存在が推定されるが、現時点では明確に特定できないもの、あるいは今後も活動を繰り返すか不明のもの)
活褶曲 Active Fold		地殻変動によって生じた波状変形。凸部または凹部を連ねた線で示す。
地形面の傾動方向 Tilting Surface Direction		地殻変動によって生じた地形面の傾き。最大傾斜方向を矢印で示す。
屈曲した谷 Offset Channel		活断層の横ずれによって変位した可能性を示唆する谷。系統的な屈曲が明瞭である場合は活断層が存在する確実な証拠となり、やや不明瞭で系統性に乏しい場合は推定活断層の根拠となる。

図1 1:25,000 岐阜県活断層図の凡例

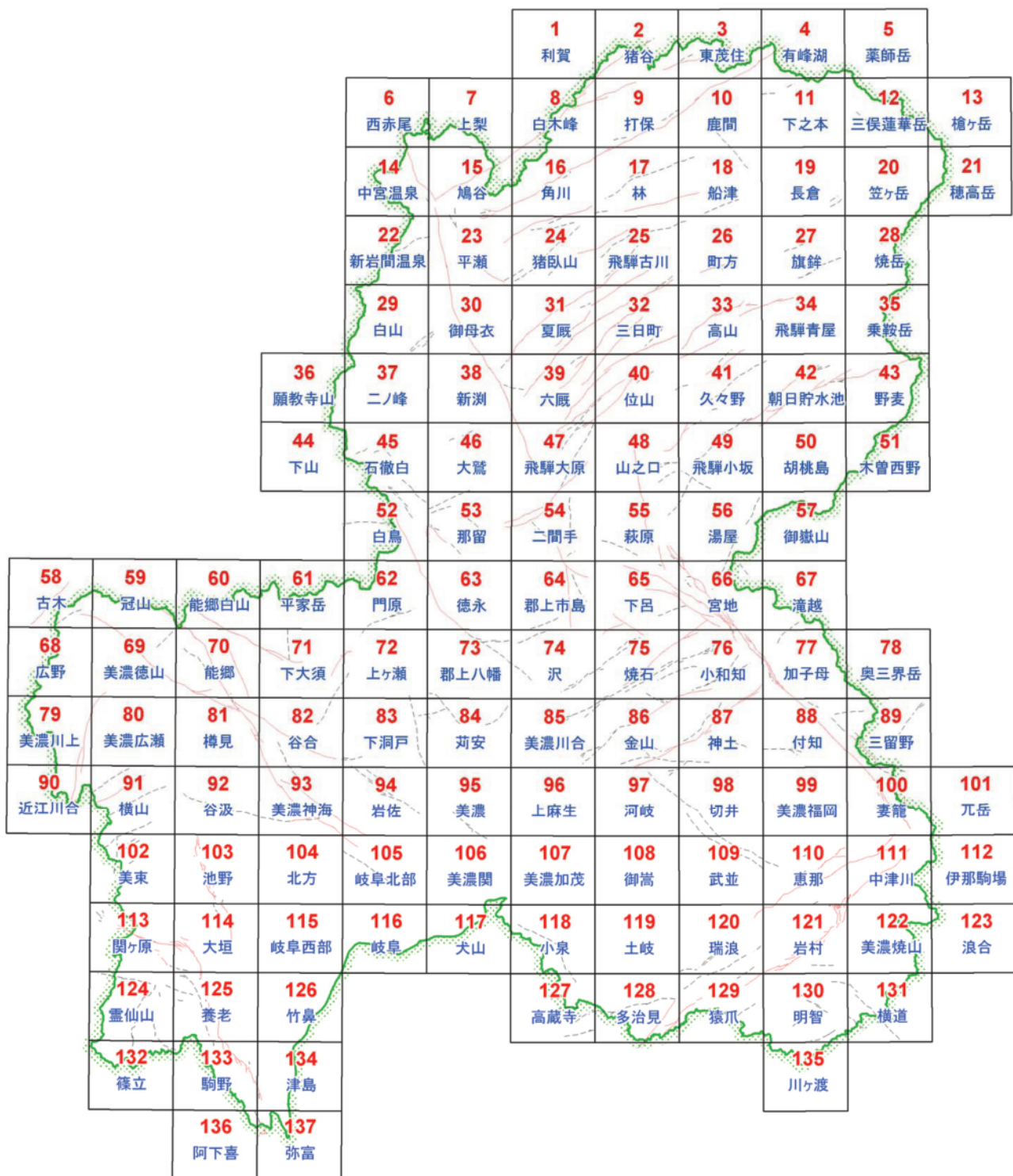


図2 1:25,000 岐阜県活断層図の索引図

参考としつつ 1891 年濃尾地震の地表地震断層の主な位置を掲載した。

基図には、国土地理院発行 1:25,000 地形図を使用し（測量法第 29 条に基づき国土地理院長の承認を得て複製、承認番号：平 22 業複・第 359 号）、世界測地系に基づく 1:25,000 地形図の図郭範囲に準じて 137 頁に区分して印刷製本した（図 2）。縮小版を巻末に添付する。

なお、変動地形学的な活断層認定においては、できるだけ多くの専門家が写真判読を行い、断層変位地形認定に関する議論を行うことが重要である。本資料作成においては、調査者全員が全域の空中写真を独自に判読した結果を持ち寄り、10 回にわたる検討会における議論を経て結論を得た。

第 1 回検討会（2009 年 9 月）：活断層調査担当者全 8 名を北部班・南部班に 2 分割。以後、両班内でそれぞれ空中写真をローテーションして判読を行い、各自マップ案を作成。

第 2 回検討会（2009 年 11 月）～第 5 回検討会（2010 年 4 月）：北部班・南部班それぞれ、4 名がマップ案を持ち寄り合議にて北部・南部の「第 1 次マップ案」を作成。その後、北部班・南部班を入れ替え、空中写真をローテーションして判読を行い、相手方の「第 1 次マップ案」に対する見解案を各自作成。

第 6 回検討会（2010 年 5 月）～第 10 回検討会（2010 年 7 月）：相手方の「第 1 次マップ案」に対する見解案をそれぞれ 4 名が持ち寄り、合議にて「第 1 次マップ案に対する見解案」を作成。その後、北部班・南部班それぞれ、もとの担当に戻り、相手方から提出された「第 1 次マップ案に対する見解案」を確認しつつ再検討を行い、合議にて最終確定。

### 3. 既存の活断層図との相違点

岐阜県全域の活断層分布を取り纏めた既存の調査資料として、「新

編 日本活断層」(活断層研究会編, 東大出版会 1991 年刊行、以下「日本活断層」と略記)、「活断層詳細デジタルマップ」(中田・今泉編, 東京大学出版会 2002 年刊行、以下「デジタルマップ」と略記)がある。また、高山周辺、阿寺断層周辺(萩原・下呂・坂下・白川)、および大垣や養老山地周辺など一部地域については、「1:25,000 都市圏活断層図」(国土地理院 1996, 2003~2008 年刊行、以下「都市圏活断層図」と略記)があり、その他にもいくつか資料がある。本資料(「1:25,000 岐阜県活断層図」)の作成においては、航空写真を詳細に判読する過程で従来の活断層地図を参照し、最新の変動地形学的認定基準により認定根拠を精査し直している。その結果、活断層の認定自体が変更になったもの、連続性に関する情報が更新されたことにより長さの変更になったものがある。また、大局的には変更がないものの、25,000 分の 1 地形図に表現した場合の位置が従来とは若干異なるものもある。

以下の説明においては、主な活断層・推定活断層を対象として、新たに判明した断層の諸相を簡潔に述べるとともに、従来の活断層図との相違点について解説する。

なお、「日本活断層」は縮尺 20 万分の 1 の地図上に活断層の位置を示しているため、25,000 分の 1 地形図上に転記できるだけの位置精度をもともと有していない。しかし 80~90 年代の知見に基づいて活断層の全体像を提示した貴重な資料であり、以下の記述においても、断層名の多くは「日本活断層」に記載された断層名を踏襲する。「日本活断層」との比較は、主に活断層の認定そのものの違いに注目する。活断層の詳細な位置に関しては、「デジタルマップ」および「都市圏活断層図」と比較する。

## (1) 牛首断層

20 万分の 1 地図番号 : ①

2万5千分の1図幅名：「2 猪谷」、「8 白木峰」、「16 角川」、「15 鳩谷」

走向：北東－南西、長さ：34km 以上（県外へ延びる）

牛首断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅰの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」には記載があり、断層位置もほぼ全域にわたって同一である。白川村、南砺市（利賀川ダム付近）ではトレンチ調査が行われ、活断層の存在が確認されている。

## (2) 茂住祐延断層

20万分の1地図番号：①②

2万5千分の1図幅名：「2 猪谷」、「3 東茂住」

走向：東北東－西南西、長さ：9km 以上（県外へ延びる）

茂住祐延断層は、右ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度Ⅲの活断層としてその存在が示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」は推定活断層として表記している。今回の判読により、直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形の連続に加え、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出されたことから、確実な活断層であると判断された。こうした新たな認定根拠の追加により、断層位置は「デジタルマップ」から最大500m程度変更になっている。

## (3) 跡津川断層

20万分の1地図番号：①②

2万5千分の1図幅名：「4 有峰湖」、「3 東茂住」、「10 鹿間」、「9 打保」、「17 林」、「16 角川」、「15 鳩谷」、「23 平瀬」

走向：北東－南西、長さ：46km 以上（県外へ延びる）

跡津川断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅰの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。また、段丘面を切る低断層崖も多数認められる。断層崖に表現される上下方向の動きは場所により異なっており、あくまで横ずれ運動が主体であると判断される。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」には記載があり、断層位置もほぼ全域にわたって同一である。宮川村野首等においてはトレンチ調査が行われ、活断層の存在が確認されている。

#### (4) 加須良断層（御母衣断層系）

20 万分の 1 地図番号：①

2 万 5 千分の 1 図幅名：「6 西赤尾」、「14 中宮温泉」、「15 鳩谷」

走向：北北西－南南東、長さ：8km 以上（県外へ延びる）

加須良断層は左横ずれを主体とする活断層であり、御母衣断層系の北部を構成している。「日本の活断層」においてその一部が确实度Ⅰの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が見出される。

御母衣断層系の中部を構成する白川断層（後述）との間には変位地形の不連続（1km 程度）があり、白川断層に比較すると変位地形の明瞭さは劣る。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」には記載がない。

#### (5) 万波峠断層

20 万分の 1 地図番号：①

2 万 5 千分の 1 図幅名：「8 白木峰」、「9 打保」

走向：東北東－西南西、長さ：9km（北東延長 4km に茂住祐延断



層)

万波峠断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」には記載がなかった。北東延長 5km には茂住祐延断層（長さ 4km）が位置している。

#### (6) 白川断層（御母衣断層系）

20 万分の 1 地図番号：①③

2 万 5 千分の 1 図幅名：「15 猪谷」、「23 平瀬」、「30 御母衣」、「38 新淵」、「39 六厩」、「47 飛驒大原」

走向：北北西－南南東、長さ：22km（長さ 17km の三尾河断層に連続する）

白川断層は左横ずれを主体とする活断層であり、御母衣断層系の中部を構成している。「日本の活断層」においては确实度Ⅱの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続する。御母衣湖南岸より以南は、「日本の活断層」では三尾河断層と呼ばれる別の断層とされたが、変位地形に不連続はなく一連の活断層である可能性が高いとしてとらえる方が妥当である。三尾河断層に沿って右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数確認される。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」には記載があり、断層の位置はほぼ全域にわたって同一である。白川村木谷ではトレンチ調査が行われ、活断層の存在が確認されている。

#### (7) 稲越断層

20 万分の 1 地図番号：①

2 万 5 千分の 1 図幅名：「16 角川」、「24 猪臥山」、「23 平瀬」

走向：東北東－西南西、長さ：13km

稲越断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において、一部が確実度Ⅲの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。また、稲越川沿いで活断層の露頭が発見されている。

「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」には記載がなかった。東方延長には数河断層があり、その一部として捉えられることもあったが、数河断層沿いには新期の断層活動の証拠が認められないことから、活動性に違いがあると判断した。

#### (8) 数河断層

20 万分の 1 地図番号：①②

2 万 5 千分の 1 図幅名：「18 船津」、「17 林」

走向：東北東－西南西、長さ：13km

数河断層は右横ずれを伴う推定活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層とされている。数河付近には右横ずれの可能性を示す谷の屈曲が認められる。しかし、その東部では断層線上にある扇状地面に変位が見られず、更新世後期に顕著な活動をしたとは考えにくい。「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」には記載がない。

#### (9) 太江断層（新称）

20 万分の 1 地図番号：①②

2 万 5 千分の 1 図幅名：「18 船津」、「17 林」

走向：東北東－西南西、長さ：10km

太江断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅲの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、太江付近に右横ずれを示す明瞭な

谷の屈曲、および低断層崖が確認される。「都市圏活断層図」の作成範囲外で、「デジタルマップ」には記載がなかった。

#### (10) 森茂断層

20 万分の 1 地図番号：①

2 万 5 千分の 1 図幅名：「23 平瀬」

走向：北西－南東、長さ：6km

森茂断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲および低断層崖が認められる。「日本の活断層」では 10km の長さを認めたが、本資料においては南部のみを活断層とした。「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」には記載がなかった。

#### (11) 畦畑断層

20 万分の 1 地図番号：①

2 万 5 千分の 1 図幅名：「24 猪臥山」、「25 飛驒古川」

走向：北東－南西、長さ：8km

畦畑断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。「日本の活断層」では約 12km の断層長を認めたが、本資料では東部のみを活断層とした。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」には記載がなかった。

#### (12) 夏厩断層

20 万分の 1 地図番号：①③④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「25 飛驒古川」、「32 三日町」、「31 夏厩」、

### 「38 新沢」

走向：北東－南西、長さ：24km

夏厩断層は右横ずれを主体とする活断層であり、直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「日本の活断層」において确实度Ⅰ～Ⅱの活断層としてその存在が概ね示されているが、その位置は最大 1km 程度ずれており、本資料が認めた活断層認定根拠が、必ずしも「日本の活断層」のそれとは同一ではなかった可能性がある。「都市圏活断層図」および「デジタルマップ」にも記載があり、その位置はほぼ同一である。

### (13) 三尾断層

20 万分の 1 地図番号：①③④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「25 飛騨古川」、「32 三日町」、「31 夏厩」

走向：北東－南西、長さ：17km

三尾断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅰの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。断層位置は「都市圏活断層図」と比較してほぼ同一である。「デジタルマップ」には記載がない。

### (14) 牧ヶ洞断層

20 万分の 1 地図番号：①③④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「25 飛騨古川」、「32 三日町」、「31 夏厩」、「39 六厩」

走向：北東－南西、長さ：26km

牧ヶ洞断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては、断層中部が确实度Ⅰ～Ⅱの活断層として示されている。南方延長部における活断層の存在と、北部区間における断層位置の詳細

細がその後に明確となった。断層全域にわたって直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形の連続、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲および低断層崖が見出された。また、断層中部においては、トレンチ調査や断層露頭により活断層の存在が確認されている。断層位置は「都市圏活断層図」および「デジタルマップ」と比較してほぼ同一である。

#### (15) 巢野俣断層

20万分の1地図番号：③④

2万5千分の1図幅名：「32 三日町」、「31 夏厩」、「39 六厩」

走向：北東－南西、長さ：16km

巢野俣断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅰの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。巢野俣付近では露頭により活断層の存在が確認されている。断層位置は「都市圏活断層図」と比較してほぼ同一である。「デジタルマップ」には記載がない。

#### (16) 藤瀬断層

20万分の1地図番号：③④

2万5千分の1図幅名：「32 三日町」、「40 位山」、「39 六厩」

走向：北東－南西、長さ：13km

活断層 右ずれ

藤瀬断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅲの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が北部区間に集中して見出される。断層位置は「都市圏活断層図」と比較してほぼ同一である。「デジタルマップ」には記載がない。

(17) 源氏岳断層

20 万分の 1 地図番号：③④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「32 三日町」、「40 位山」、「39 六厩」

走向：北東－南西、長さ：19km

源氏岳断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲や低断層崖が見出される。断層位置は「都市圏活断層図」と全域にわたってほぼ同一であり、「デジタルマップ」とも南部において一致している。

(18) 江名子断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「33 高山」、「34 飛騨青屋」

走向：東北東－西南西、長さ：17km

江名子断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅰの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。断層位置は「都市圏活断層図」および「デジタルマップ」と比較してほぼ同一である。断層中部ではトレンチ調査により活断層の存在が確認されている。

(19) 宮峠断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「33 高山」、「41 久々野」

走向：東北東－西南西、長さ：7km

宮峠断層は右横ずれを主体とする活断層であり、直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲や断層露頭

が確認される。「日本の活断層」において確実度Ⅰ～Ⅱの活断層としてその存在が示されているが、その位置は最大 500m 程度離れており、必ずしも本資料が確認した認定根拠によるものではなかった可能性もある。断層位置は「都市圏活断層図」および「デジタルマップ」と比較してほぼ同一である。

#### (20) 無数河断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「33 高山」、「41 久々野」

走向：東北東－西南西、長さ：7km

無数河断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が比較的多数見出される。「都市圏活断層図」は一部区間について活断層の存在を推定している。「デジタルマップ」には記載がない。

#### (21) 三尾河断層（御母衣断層系）

20 万分の 1 地図番号：③

2 万 5 千分の 1 図幅名：「38 新湊」、「39 六厩」、「47 飛騨大原」

走向：北東－南西、長さ：17km（長さ 22km の白川断層に連続する）

三尾河断層は左横ずれを主体とする活断層であり、御母衣断層系の南部を構成している。「日本の活断層」においては一部が確実度Ⅰの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数確認される。「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」で認定された活断層線とほぼ全域にわたって同一である。御母衣湖南岸より以北は、「日本の活断層」では白川断層と呼ばれる別の断層とされたが、変位地形

に不連続はなく一連の活断層である可能性が高い。

## (22) ヌクイ谷断層

20 万分の 1 地図番号：③④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「40 位山」、「39 六厩」、「47 飛騨大原」

走向：北東－南西、長さ：15km

ヌクイ谷断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。断層位置は「都市圏活断層図」とほぼ同一であり、「デジタルマップ」も中部区間を認定している。断層中央部（宮村）においては明瞭な低断層崖が確認され、その付近で行われたトレンチ調査によって活断層の存在が確認されている。

## (23) 宮川断層

20 万分の 1 地図番号：③④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「40 位山」、「39 六厩」、「47 飛騨大原」

走向：北東－南西、長さ：12km

宮川断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が比較的多数見出される。また宮村で行われたトレンチ調査により活断層の存在が確認されている。断層位置は南端部以外は「都市圏活断層図」とほぼ同一である。「デジタルマップ」には記載がない。なお、南方延長には大原断層が位置し、従来は宮川断層と大原断層が一連の活断層であるとの見解もあったが、新期の活動性に違いがあることを認め、本資料においては連続しないものと判断した。



#### (24) 口有道断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「41 久々野」、「42 朝日貯水池」

走向：北東－南西、長さ：9km

口有道断層は右横ずれの可能性のある推定活断層である。「日本の活断層」においては确实度Ⅱの活断層として示されている。直線的な断層谷や鞍部地形が連続し、右横ずれの可能性のある谷の屈曲が見出される。ただしその屈曲が斜面下流方向であるため、本資料は推定活断層にとどめた。「都市圏活断層図」においても、ほぼ同じ位置に推定活断層を示している。「デジタルマップ」には記載がない。南西延長約 4km には洞断層が位置している。

#### (25) 西洞断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「41 久々野」、「42 朝日貯水池」

走向：北東－南西、長さ：9km（南西延長に小坂断層）

西洞断層は右横ずれを主体とする活断層であり、直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「日本の活断層」においては、近隣に确实度Ⅲの活断層が示されている。断層位置は「都市圏活断層図」とほぼ同一である。「デジタルマップ」には記載がない。なお、南西延長には小坂断層（推定活断層）が位置し、断層線は極めて近接しているため、一連の断層である可能性もある。

#### (26) 小坂断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「41 久々野」、「49 飛驒小坂」

走向：北東－南西、長さ：9km

小坂断層は右横ずれの可能性を有する推定活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれの可能性を示す谷の屈曲が見出される。ただし、断層線に不連続部があり、連続性に疑問があることから、ここでは推定断層にとどめた。なお、「都市圏活断層図」ではほぼ同一の場所に活断層が認定されている。北東延長部には西洞断層があり、極めて近接していることから連続する活断層である可能性もある。

#### (27) 猪之鼻断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「43 野麦」、「42 朝日貯水池」、「50 胡桃鳥」、「49 飛驒小坂」

走向：東北東－西南西、長さ：23km 以上

猪之鼻断層は右横ずれを主体とする活断層であり、直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「日本の活断層」は、断層中部～南部を确实度Ⅰ～Ⅱの活断層として示している。断層位置は「都市圏活断層図」とほぼ同一である。「デジタルマップ」も中部区間を同様に示している。東部 8km の区間は本資料によって新たに認定されたものであり、県外への延長も確認されている。

#### (28) 大原断層

20 万分の 1 地図番号：③

2 万 5 千分の 1 図幅名：「47 飛驒大原」

走向：北北東－南南西、長さ：10km

大原断層は宮川断層と奥住断層の間に位置する推定活断層である。「日本の活断層」において确实度Ⅰの活断層としてその存在が示

されていた。大原周辺の馬瀬川沿いおよび小原川沿いには直線的な河谷や鞍部地形が連続するものの、新期の活断層を確実に示す変位地形は認められない。また、宮川断層南端および奥住断層北端の断層線とは雁行し、必ずしも連続しないことから、大原断層は推定断層にとどめた。この認定は「都市圏活断層図」および「デジタルマップ」も同様であり、位置もほぼ同一である。

### (29) 奥住断層

20 万分の 1 地図番号：③

2 万 5 千分の 1 図幅名：「47 飛騨大原」

走向：北東－南西、長さ：15km

奥住断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅰ～Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が比較的多数見出される。断層位置は「都市圏活断層図」と比較してほぼ同一であり、「デジタルマップ」も一部区間を認定している。従来は大原断層の南部とされることもあった。

### (30) 洞断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「48 山之口」、「49 飛騨小坂」

走向：北北東－南南西、長さ：5km（北東延長に推定断層あり）

洞断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」には記載されていない（ただし北方延長には确实度Ⅱの活断層が示されている）。明瞭な鞍部地形が連続し、山地斜面上には低断層崖が認められる。また、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲も確認される。「都市圏活断層図」も同一の断層を認定している。なお、北東延長部には推定断層が断続的に認められる。

### (31) 八幡断層

20 万分の 1 地図番号：③⑥

2 万 5 千分の 1 図幅名：「52 白鳥」、「62 門原」、「63 徳永」、「73 郡上八幡」

走向：北西－南東、長さ：21km（南東延長に長さ 10km の推定断層あり）

八幡断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅰ～Ⅱの活断層としてその存在が示されている。山地斜面に連続する傾斜変換線や明瞭な鞍部地形が確認され、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」はほぼ同一の断層を認定している。なお、南東延長は、長良川東岸に連続する推定断層（長さ 10km）が位置しており、連続性の評価については課題である。

### (32) 阿多岐断層

20 万分の 1 地図番号：③

2 万 5 千分の 1 図幅名：「53 那留」

走向：東北東－西南西、長さ：6km

阿多岐断層は右横ずれの可能性を有する推定活断層であり、「日本の活断層」において确实度Ⅱの活断層としてその存在が示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれの可能性を有する谷の屈曲もある。ただし確実に活断層の存在を示す変位地形等の情報はなため、推定活断層にとどめる。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」には記載がない。

### (33) 那留断層

20 万分の 1 地図番号：③

2万5千分の1図幅名：「53 那留」

走向：北西－南東、長さ：3km（東延長に長さ 2km の推定断層あり）

那留断層は西側隆起で左横ずれを伴う活断層であり、「日本の活断層」において確実度Ⅰ～Ⅱの活断層としてその存在が示されている。段丘面上に低断層崖があり、断層線上では左横ずれを示す谷の屈曲が確認される。「都市圏活断層図」の作成範囲外であり、「デジタルマップ」にはほぼ同一の活断層が示されている。なお、西側 1km 程度の範囲に併走する短い低断層崖が認められ、断層線が複数列あることを示している（大野断層を含む）。

#### (34) 萩原西断層

20万分の1地図番号：④

2万5千分の1図幅名：「48 山之口」、「55 萩原」

走向：北北西－南南東、長さ：15km

萩原西断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度Ⅰの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。東側隆起を示す低断層崖も認められる。

断層位置は「都市圏活断層図」とかなり似ており、四美辻から羽根にかけては「デジタルマップ」とも類似するが、区間によっては数 100m 変更した。北端は、「デジタルマップ」では黍生付近とし北北東走向に変化するとされるが、「都市圏活断層図」と同じくそのまま北北西にのびて上之田付近に至るとした。ただし「都市圏活断層図」が認定した北末端部の左ステップ部分については、まっすぐ連続する 1 条のトレースとして認定した。南端についても、「デジタルマップ」では西上田断層と連続しているが、「都市圏活断層図」と同じく跡津付近で西上田断層と左ステップの関係にあると判断した。

### (35) 畑佐断層

20 万分の 1 地図番号：③⑥

2 万 5 千分の 1 図幅名：「54 二間手」、「64 郡上市島」

走向：北－南、長さ：11km

畑佐断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては确实度 III の活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」にはこの断層の一部が推定活断層として記されている。北－南走向のトレースと北西－南東走向のトレースを一括して畑佐断層とした。北方には 6km の推定活断層があり、これを含めると 17km となる。

### (36) 小川断層

20 万分の 1 地図番号：④

2 万 5 千分の 1 図幅名：「55 萩原」

走向：西北西－東南東、長さ：5km

小川断層は左横ずれを主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては确实度 I の活断層として示されている。「都市圏活断層図」では活断層として小川付近～昭和付近～惣島付近に認定されているが、「デジタルマップ」では認定されていない。直線的な断層谷や鞍部地形、左横ずれの可能性を示唆する谷の屈曲は見出されるものの、やや不明瞭で系統性に乏しいため、昭和付近から惣島付近にかけてのみを推定活断層として認定することとした。その位置は「都市圏活断層図」とほぼ同じである。南東方には下呂断層が 2km 右ステップして分布する。

### (37) 西上田断層

20 万分の 1 地図番号：④⑥

2 万 5 千分の 1 図幅名：「55 萩原」、「65 下呂」

走向：北北西－南南東、長さ：3km

西上田断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。東側隆起を示す低断層崖も認められる。萩原西断層と近接して分布し左ステップの関係にあるほか、湯ヶ峰断層・下呂断層と近接して並走する。

断層位置の北端は、跡津付近に断層を認定する積極的な証拠を見出すことができなかつたため、「デジタルマップ」「都市圏活断層図」より若干南の中呂西方とした。南端については「都市圏活断層図」とほぼ同じであり、「デジタルマップ」のように下呂断層に続く積極的な証拠は見出されなかつた。その他は「デジタルマップ」「都市圏活断層図」とかなり似ているが、区間によっては数 100m 変更した。

### (38) 湯ヶ峰断層

20 万分の 1 地図番号：④⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「55 萩原」、「56 湯屋」、「66 宮地」

走向：北西－南東、長さ：12km

湯ヶ峰断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層（名称は萩原東断層）として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。南西側隆起を示す低断層崖も認められる。阿寺断層の延長線上にあつて西上田断層・下呂断層・宮地断層と近接して並走する。

「デジタルマップ」では断層の北端を大洞付近としているが、「都市圏活断層図」と同様、中呂付近までのびると判断した。ただし連続性等を再検討し一部トレースの位置を変更した。また湯ヶ峰付近につ

いては、「デジタルマップ」には湯ヶ峰の北東側を通過するトレースが記されており「都市圏活断層図」には同じく南西側を通過するトレースが記されているが、両者を認定した。その他は「デジタルマップ」「都市圏活断層図」とかなり似ているが、区間によっては数 100m 変更した。

### (39) 若栃断層

20 万分の 1 地図番号：④⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「56 湯屋」、「66 宮地」

走向：北北東－南南西、長さ：14km

若栃断層は推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II・右横ずれの活断層として示されている。「都市圏活断層図」は北部が作成範囲外。南部は作成範囲内であるが示されていない。「デジタルマップ」では認定されていない。直線的な断層谷や鞍部地形が連続するものの、やや不明瞭で系統性に乏しく、横ずれを示す谷の屈曲は見出されなかったため、推定活断層として認定した。長さは、若栃山の南でいったん途切れるが、若栃山付近のトレースと寺田小屋山付近のトレースを一括して計測している。

### (40) 笹ヶ峰断層

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「58 古木」、「68 広野」

走向：北東－南西、長さ：4km 以上

笹ヶ峰断層は右横ずれを主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では認定されていない。直線的な断層谷や鞍部地形、左横ずれの可能性を示唆する谷の屈曲は見出されるものの、やや不明瞭で系統性に乏しいため、推定活断層と



して認定した。県外まで連続して認められる。

#### (41) 揖斐川断層

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「58 古木」、「59 冠山」、「69 美濃徳山」、「70 能郷」、「81 樽見」

走向：西北西－東南東、長さ：25km

揖斐川断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では推定活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。東端は根尾谷断層の直近にまで達している。現在はかなりの部分が徳山ダム湖底を通過している。

#### (42) 温見断層

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「59 冠山」、「60 能郷白山」、「70 能郷」、「71 下大須」

走向：西北西－東南東、長さ：17km 以上

温見断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。「デジタルマップ」は大河原付近以東を推定活断層としているが、下大須付近まで連続して活断層として認定した。大河原付近以西の断層位置は「デジタルマップ」とかなり似ているが、区間によっては数 100m 変更した。根尾谷断層や黒津断層と近接して並走しており、県外まで連続して認められる。

#### (43) 根尾谷断層

20 万分の 1 地図番号：⑤⑨

2 万 5 千分の 1 図幅名：「59 冠山」、「60 能郷白山」、「70 能郷」、「81 樽見」、「82 谷合」、「93 美濃神海」、「105 岐阜北部」

走向：北西－南東、長さ：42km

根尾谷断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。低断層崖も多く、多くの地点で認定される。北部では温見断層や黒津断層と、南部では長滝断層や梅原断層と、それぞれ近接して並走する。

「デジタルマップ」による北端は能郷谷にあるが、より北方の能郷白山西方、県境付近まで連続すると判断される。一方、南端について、「デジタルマップ」は佐野付近としているが、同時にその南東延長部に推定活断層を示している。この推定活断層も含め、栗野付近までを根尾谷断層として認定した。その他、能郷付近に右ステップを認定したこと、水鳥付近の東側のトレースが南方へと、また西側のトレースが北方へとそれぞれ延長して認定されたことや、複数地点において低断層崖があらたに認定されたこと等により、区間によっては「デジタルマップ」と比べて数 100m の位置変更があった。

#### (44) 下呂断層

20 万分の 1 地図番号：⑥⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「65 下呂」、「66 宮地」、「76 小和知」

走向：西北西－東南東、長さ：18km

下呂断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。直線的な断層

谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出されるほか、北東側隆起を示す低断層崖も認められる。阿寺断層の延長線上にあって湯ヶ峰断層・西上田断層・宮地断層と近接して並走する。北西方には小川断層が 2km 右ステップして分布する。

住吉付近以西について、「デジタルマップ」は北方の西上田断層へと連続するとし、また「都市圏活断層図」は西村付近に達する推定活断層を認定しているが、住吉付近以東から住吉付近、西村付近を通過して西方へと連続すると判断した。住吉付近以東のトレースの位置は「デジタルマップ」「都市圏活断層図」とかなり似ているが、数 100m の変更があった区間もある。御厩野南方に南西側隆起の低断層崖と北東側隆起の撓曲崖があらたに認定された。

#### (45) 宮地断層

20 万分の 1 地図番号：⑥⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「65 下呂」、「66 宮地」

走向：西北西－東南東、長さ：11km

宮地断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。阿寺断層の延長線上にあって湯ヶ峰断層・下呂断層と近接して並走する。「デジタルマップ」では大淵付近に推定活断層が示されるのみであるが、「都市圏活断層図」には八尾山北方から宮地付近に活断層が認定されている。

断層位置は「都市圏活断層図」とかなり似ているが、区間によっては数 100m 変更した。また、住吉付近に北西へと分岐するトレースをあらたに認定したほか、東端に関し、宮地南方から野尻南方にまで至るトレースに認定した。

(46) 岩屋断層（新称）

20 万分の 1 地図番号：⑥

2 万 5 千分の 1 図幅名：「65 下呂」、「75 焼石」

走向：西北西－東南東 / 東北東－西南西、長さ：5km / 3km

岩屋断層は、西北西－東南東走向で左横ずれを主体とする活断層と東北東－西南西走向で右横ずれを主体とする活断層によって構成される。「日本の活断層」「デジタルマップ」には示されていない。「都市圏活断層図」は中央部以東が作成範囲内であり、今回認定したトレースの一部は推定活断層としてほぼ同じ位置に示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。

(47) 久野川断層

20 万分の 1 地図番号：⑥⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「66 宮地」、「76 小和知」、「75 焼石」

走向：北東－南西、長さ：14km

久野川断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度Ⅰの活断層として示されている。「デジタルマップ」では推定活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。火打断層と近接して並走する。北東端は宮地断層東端付近に達する。断層位置は「都市圏活断層図」とかなり似ているが、区間によっては数 100m 変更したほか、夏焼付近に、北東方へと分岐するトレースをあらたに認定している。

(48) 阿寺断層

20 万分の 1 地図番号：⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「66 宮地」、「76 小和知」、「77 加子母」、「88

付知]、「89 三留野」、「100 妻籠」

走向：北西－南東、長さ：39km

阿寺断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度Ⅰの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。低断層崖も多くの地点で認められる。北西端付近では湯ヶ峰断層・下呂断層・宮地断層と近接して並走する。南東端付近においては馬籠峠断層と交わるような特徴的な分布となっている。なお、小和知付近を通過するトレースに小和知断層の名称を付し、番田北東方、南西側隆起を示すトレースに連続するとする文献もある。

北西端の位置は「都市圏活断層図」と同じく御厩野付近とした。小郷西方において下呂断層と連続する点も「都市圏活断層図」と同じであり、これについては「デジタルマップ」にも同様のトレースが示されている。南東端については、「都市圏活断層図」「デジタルマップ」より 1km 程度北西の川並付近とした。

断層位置は「デジタルマップ」「都市圏活断層図」とかなり似ているが、区間によっては数 100m 変更した。「都市圏活断層図」からの主要な変更点としては、1) 小和知東方、最も北東側のトレースを北西へと 1km 延長した、2) 万賀付近～倉屋付近、最も南西側のトレースの北西部を推定活断層に変更した、3) 森平南方に系統的な左横ずれを認定した、等が挙げられる。「デジタルマップ」と比較すると、小和知付近～万賀付近および南東端部について大きく変更する結果となっている。

#### (49) 大草履断層（新称）

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「69 美濃徳山」、「80 美濃広瀬」、「79 美濃川上」、「90 近江川合」

走向：北北東－南南西、長さ：16km 以上

大草履断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 III の活断層として図示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」にはこの断層の一部が推定活断層として記されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。県外まで連続して認められる。

#### (50) 黒津断層

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「70 能郷」

走向：北西－南東、長さ：8km

黒津断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。黒津付近には南西側隆起を示す低断層崖が認められる。「デジタルマップ」と比べ、北西端を 1km、南東端を 1km 延長して認定したほか、断層北西部の位置を数 100m 変更したが、その他に変更はない。根尾谷断層や温見断層と近接して並走する。

#### (51) オリ谷断層（新称）

20 万分の 1 地図番号：⑤⑥

2 万 5 千分の 1 図幅名：「71 下大須」、「72 上ヶ瀬」

走向：北北東－南南西、長さ：4km

オリ谷断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 III の活断層として図示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では認定されていない。明

瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。田口南西方のオリ谷南側斜面に、北側隆起の低断層崖と谷の右屈曲が明瞭に認められる。北方 2km に長さ 8km の推定活断層があり（「日本の活断層」においては確実度 III の活断層として示されており、「デジタルマップ」には示されていない）、南方には 2km 左ステップして 8km の推定活断層が認められる（「日本の活断層」「デジタルマップ」ともに示されていない）。これらを含めると、全体として 20km となる。

#### (52) 火打断層

20 万分の 1 地図番号：⑥⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「76 小和知」、「75 焼石」

走向：東北東－西南西、長さ：16km

火打断層は右横ずれを主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。「都市圏活断層図」では推定活断層として認定されている。「デジタルマップ」では一部が推定活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれの可能性を示唆する谷の屈曲が多数見出されるものの、やや不明瞭で系統性に乏しいため、推定活断層として認定した。久野川断層と近接して並走する。東端は下呂断層南端付近に達する。また、この断層と並走し福来付近からさらに西方へと伸びる推定活断層が認められ（「日本の活断層」「デジタルマップ」ともに示されておらず、「都市圏活断層図」では大部分が作成範囲外）、これを含めると 26km に達する。位置についても「都市圏活断層図」から多くの変更があった。

#### (53) 佐見断層

20 万分の 1 地図番号：⑥⑦

2万5千分の1図幅名：「76 小和知」、「86 金山」

走向：東北東－西南西、長さ：12km

佐見断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度Ⅰの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。久室付近には北側隆起の低断層崖も認められる。西方および東方の延長に推定活断層があり、これらを含めると26kmに達する。その東端は阿寺断層の直近までのびる。

この断層の認定については「デジタルマップ」および「都市圏活断層図」および本資料で大きく異なる。「デジタルマップ」では細野付近～成山付近に推定活断層、久室付近～有本付近に活断層がそれぞれ示され、「都市圏活断層図」においてはこれらを含む小川付近～尾城山北方付近がすべて活断層として示されている。今回、活断層の西端は小川付近の3km東方、東端は尾城山北方から6km西方と判断し、他の区間は推定活断層とした。また、小川付近からさらに西方6kmにわたって推定活断層を延長した。位置についても多くの変更があった。

#### (54) 白川断層

20万分の1地図番号：⑥⑦

2万5千分の1図幅名：「76 小和知」、「87 神土」、「86 金山」

走向：東北東－西南西、長さ：21km

白川断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度Ⅰの活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。並走する推定活断層があり、また西方には分岐する推定活断層があって全体で22kmに達する。

「デジタルマップ」では五加付近～日向付近に活断層が示され、「都



市圏活断層図」においてはこれを含む河岐東方～角嶺西方に活断層が示されている。今回、「都市圏活断層図」と比較して西端東端ともに1km程度延長する結果となった。位置については両端部および五加付近で数100mの変更があったこと、水戸野付近に分岐トレースを認定したこと以外、「デジタルマップ」「都市圏活断層図」から大きな変更はない。

#### (55) 武儀川断層

20万分の1地図番号：⑤

2万5千分の1図幅名：「81 樽見」、「82 谷合」

走向：西北西－東南東、長さ：16km

武儀川断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては确实度Ⅰ以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では一部が活断層として認定されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。東方2kmに11kmの推定活断層が認められる（一部は「デジタルマップ」において推定活断層として示されている）。これを含めると全体としては29kmとなる。

「日本の活断層」はこれら全体を武儀川断層として示している。断層位置について、「デジタルマップ」で示されている区間については、塩後付近を除いてほぼ変更はないが、今回あらたに、門脇北方において南側隆起の低断層崖を認定した。

#### (56) 長滝断層

20万分の1地図番号：⑤

2万5千分の1図幅名：「82 谷合」、「93 美濃神海」

走向：北西－南東、長さ：8km

長滝断層は左横ずれを主体とする推定活断層であり、「日本の活断

層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では推定活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれの可能性を示唆する谷の屈曲が多数見出されるものの、やや不明瞭で系統性に乏しいため、推定活断層として認定した。根尾谷断層や梅原断層と近接して並走する。

#### (57) 城ヶ根山断層

20 万分の 1 地図番号：⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「89 三留野」

走向：北西－南東、長さ：5km

城ヶ根山断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。断層位置は「都市圏活断層図」とほぼ同じであり、「デジタルマップ」とは、中央部を除き、数 100m 異なる。阿寺断層と並走する。両延長部の推定活断層を含めると、県内のみでは 11km となる。

#### (58) 馬籠峠断層

20 万分の 1 地図番号：⑦

2 万 5 千分の 1 図幅名：「89 三留野」、「100 妻籠」

走向：北北東－南南西、長さ：2km 以上

馬籠峠断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続する。低断層崖も認められる。県外まで連続して認められる。南端付近においては阿寺断層と交わるような特徴的な分布となっている。断層位置は「デジタルマップ」「都市圏活断層図」

とほぼ同じである。

(59) 諸家断層（新称）

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「91 横山」

走向：東北東－西南西、長さ：8km

諸家断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 III の活断層として図示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では推定活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。付近には並走する推定活断層が複数認められる。その多くは「日本の活断層」においては確実度 III の活断層として、また「デジタルマップ」においては推定活断層として示されている（美東付近以南については「都市圏活断層図」の作成範囲内であるが示されていない）。

(60) 谷汲断層

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「92 谷汲」、「93 美濃神海」

走向：西北西－東南東、長さ：15km

谷汲断層は左横ずれを主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では一部が推定活断層として示されている。直線的な断層谷や鞍部地形が連続し、左横ずれの可能性を示唆する明瞭な谷の屈曲が見出されるものの、やや不明瞭で系統性に乏しいため、推定活断層として認定した。東端は木知原断層とほぼ同じ位置であるが、走向が若干異なっており横ずれのセンスも逆である。

(61) 木知原断層

20 万分の 1 地図番号：⑤

2 万 5 千分の 1 図幅名：「93 美濃神海」

走向：東北東－西南西、長さ：3km

木知原断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。西端は谷汲断層とほぼ同じ位置であるが、走向が若干異なっており横ずれのセンスも逆である。東方には根尾谷断層と交差する推定活断層がありこれを含めると 4km となる。断層位置は「デジタルマップ」とほぼ同じであるが、西端・東端はそれぞれ 1km 東方に変更となった。

(62) 梅原断層

20 万分の 1 地図番号：⑤⑥

2 万 5 千分の 1 図幅名：「93 美濃神海」、「94 岩佐」

走向：西北西－東南東、長さ：13km

梅原断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。根尾谷断層や長滝断層と近接して並走する。西端の位置は、「デジタルマップ」より 3km 西方の金坂峠北方とした。その他は「デジタルマップ」とほぼ同じ位置であるが、高木西方については山麓線沿いではなくやや山側に認定した。

(63) 赤河断層

20 万分の 1 地図番号：⑥⑦⑩

2万5千分の1図幅名：「97 河岐」、「98 切井」、「109 武並」、「110 恵那」

走向：北西－南東、長さ：22km

赤河断層は南西側隆起の縦ずれ運動を主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」は北部が作成範囲内であり、推定活断層として示されている。「デジタルマップ」でも一部が推定活断層として認定されている。南西側山地の北東縁を限る断層としてその存在が指摘されているが、最近数 10 万年間に活動した明確な証拠はみつからない。南西側を 13km の推定活断層が並走する。

#### (64) 池田山断層

20 万分の 1 地図番号：⑧

2万5千分の1図幅名：「103 池野」、「114 大垣」

走向：北北西－南南東、長さ：14km

池田山断層は西側隆起の縦ずれ運動を主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II の活断層として示されている。西側隆起を示す明瞭な低断層崖・撓曲崖が連続して認定される。断層位置は、「都市圏活断層図」「デジタルマップ」とかなり似ているが、数 100m 変更となった地点やあらたに低断層崖・撓曲崖を認定した地点があるほか、南端部を推定活断層に変更した。

#### (65) 手賀野断層

20 万分の 1 地図番号：⑩

2万5千分の1図幅名：「110 恵那」

走向：東北東－西南西、長さ：5km

手賀野断層は南側隆起の縦ずれ運動を主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されてい

る。「都市圏活断層図」の作成範囲外。南側隆起を示す明瞭な低断層崖・撓曲崖が連続して認定される。屏風山断層と並走する。西方には 2km の間をおいて 2km の推定活断層があり、これも含めると 8km となる。

「デジタルマップ」では西方の推定活断層から手賀野付近まで活断層を認定しているが、青木付近より西側については一部を推定活断層として認定するにとどまり、青木付近より東側については、手賀野南方のトレースを東方に延長し、手賀野北西方のトレースの東半部のみを認定した。

#### (66) 屏風山断層

20 万分の 1 地図番号：⑩

2 万 5 千分の 1 図幅名：「111 中津川」、「110 恵那」、「121 岩村」、「120 瑞浪」

走向：東北東－西南西、長さ：22km

屏風山断層は南側隆起の縦ずれ運動を主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。東野付近や中垣外南東方、釜沢北東方に南側隆起を示す明瞭な低断層崖が認定される。釜沢北東方のトレースは「日本の活断層」においては蕨平断層と称され、確実度 I の活断層とされている。手賀野断層と並走する。西方の稲津付近の推定活断層も含めると 34km となる。「デジタルマップ」では尾鳩付近以東のみを活断層としているが、そのほとんどは今回数 100m の位置変更となった。

#### (67) 川上断層

20 万分の 1 地図番号：⑩

2 万 5 千分の 1 図幅名：「111 中津川」、「110 恵那」、「122 美濃焼山」、

### 「121 岩村」

走向：東北東－西南西、長さ：14km

川上断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では認定されていない。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。西端では飯沼断層や恵那山断層と近接して分布する。

### (68) 関ヶ原断層

20 万分の 1 地図番号：⑧

2 万 5 千分の 1 図幅名：「113 関ヶ原」、「114 大垣」

走向：西北西－東南東、長さ：7km 以上

関ヶ原断層は左横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、左横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される。東延長には宮代断層が分布する。西は県外まで連続して認められる。断層位置は「都市圏活断層図」「デジタルマップ」とよく似ているものの、数 100m 変更になった地点があるほか、小関付近の分岐トレースや瑞竜寺付近の右ステップの認定、東端におけるトレース分岐パターンの再検討等を行った。

### (69) 宮代断層

20 万分の 1 地図番号：⑧

2 万 5 千分の 1 図幅名：「114 大垣」、「125 養老」

走向：北北西－南南東、長さ：6km

宮代断層は西側隆起の縦ずれ運動を主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II の活断層として示されている。西

側隆起を示す明瞭な低断層崖・撓曲崖が連続して認定される。断層位置は、「都市圏活断層図」「デジタルマップ」とかなり似ているが、数100m 変更となった地点やあらたに低断層崖・撓曲崖を認定した地点がある。

#### (70) 華立断層

20 万分の 1 地図番号：⑨

2 万 5 千分の 1 図幅名：「118 小泉」、「127 高蔵寺」

走向：北西－南東、長さ：11km

華立断層は南西側隆起の縦ずれ運動を主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 II の活断層として示されている。南端は「都市圏活断層図」の作成範囲内であるが示されていない。「デジタルマップ」では認定されていない。南西側山地の北東縁を限る断層としてその存在が指摘されているが、最近数 10 万年間に活動した明確な証拠はみつかっていない。

#### (71) 飯沼断層

20 万分の 1 地図番号：⑩

2 万 5 千分の 1 図幅名：「121 岩村」

走向：北－南、長さ：3km

飯沼断層は西側隆起および東側隆起の縦ずれ運動を主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では一部が推定活断層として認定されている。川上断層と恵那山断層の間付近に発達する。

#### (72) 恵那山断層

20 万分の 1 地図番号：⑨⑩



2万5千分の1図幅名：「121 岩村」、「129 猿爪」、「128 多治見」

走向：東北東－西南西、長さ：28km

恵那山断層は南側隆起および右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。猿爪付近から住久保付近の間にはトレースは認定されないが、地形の連続性を考慮し 28km と計測した。西端付近は「都市圏活断層図」の作成範囲内であり、一部に推定活断層が示されている。「デジタルマップ」では花白南方から大円寺北当方までのみを活断層として認定している。猿爪付近以東では南側隆起を示す低断層崖・撓曲崖や右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出される一方、住久保付近以西では低断層崖・撓曲崖は認められず右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲のみが多数見出される。位置については「都市圏活断層図」と比較して、岩村東方以外は数 100m 変更となっている。飯沼断層や川上断層と近接して分布する。

### (73) 今須断層

20万分の1地図番号：⑧

2万5千分の1図幅名：「124 霊仙山」

走向：西北西－東南東、長さ：5km 以上

今須断層は左横ずれを主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では推定活断層として示されている。直線的な断層谷や鞍部地形が連続し、左横ずれの可能性を示唆する明瞭な谷の屈曲が見出されるものの、やや不明瞭で系統性に乏しいため、推定活断層として認定した。県外まで連続して認められる。東方延長には 2km の間において 4km の推定活断層があり、一括して計測すると県内のみでは 11km となる。

#### (74) 藤原岳断層

20 万分の 1 地図番号：⑧

2 万 5 千分の 1 図幅名：「124 霊仙山」、「132 篠立」

走向：北北東－南南西、長さ：11km 以上

藤原岳断層は西側隆起の縦ずれ運動を主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」の作成範囲外。「デジタルマップ」では一部が推定活断層として示されている。鈴鹿山脈東縁を限る断層としてその存在が指摘されているが、最近数 10 万年間に活動した明確な証拠はみつかっていない。なお、「日本の活断層」は細野付近以南のみを藤原岳断層と呼んでいるが、ここでは細野以北も含め一括して藤原岳断層とした。県外まで連続して認められる。

#### (75) 養老断層

20 万分の 1 地図番号：⑧

2 万 5 千分の 1 図幅名：「125 養老」、「133 駒野」、「134 津島」、「136 阿下喜」、「137 弥富」

走向：北北西－南南東、長さ：22km 以上

養老断層は西側隆起の縦ずれ運動を主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I の活断層として示されている。西側隆起を示す明瞭な低断層崖・撓曲崖が連続して認定される。断層位置は、「都市圏活断層図」「デジタルマップ」とかなり似ているが、数 100m 変更となった地点やあらたに低断層崖・撓曲崖を認定した地点がある。長さは、北端を牧田付近として県境までを計測した値である。県外まで連続して認められる。

#### (76) 笠原断層

20 万分の 1 地図番号：⑨

2万5千分の1図幅名：「127 高蔵寺」、「128 多治見」

走向：東北東－西南西、長さ：14km

笠原断層は南側隆起の縦ずれ運動を主体とする推定活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」「デジタルマップ」とも推定活断層として示している。南側山地の北縁を限る断層としてその存在が指摘されているが、最近数 10 万年間に活動した明確な証拠はみつかっていない。

#### (77) 猿投山北断層

20 万分の 1 地図番号：⑨

2万5千分の1図幅名：「128 多治見」

走向：北東－南西、長さ：7km 以上

猿投山北断層は右横ずれを主体とする活断層であり、「日本の活断層」においては確実度 I 以下の活断層として示されている。「都市圏活断層図」「デジタルマップ」とも推定活断層として示しているが、直線的な断層谷や明瞭な鞍部地形が連続し、右横ずれを示す明瞭な谷の屈曲が多数見出されるため活断層として認定した。北東延長には 1km の間をおいて 12km の推定活断層があり、一括して計測すると県内のみでは 20km となる。南西方は県外まで連続して認められる。

#### 4. 利用上の注意

1:25,000 岐阜県活断層図および同解説書(あわせて以下「本資料」)は、直下型地震を起こし得る活断層の存在を予め知り、これに積極的に備えたいという希望に応える目的で刊行されています。活断層があるからと言ってすぐに危険ということでは必ずしもありませんが、長期的な安全性の確保のため、学校・病院等の建て替えの際に、活断層の直上を避けるといった取り組みが、日本各地で少しずつ始まってい

ます。活断層の詳細な位置情報を地震防災にどのように活かせるか、前向きに考えていただくきっかけとして利用していただきたいと願っています。

本資料は、地形的特徴から明らかに活断層であると認定できるものを示しています。平野部等では、地形的な特徴が埋積されてしまい、その存在がわからなくなっている可能性のあるものもあり得ます。そのため、本書に示されたもの以外に活断層が無いとは言いきれないことには留意してください。「岐阜―宮線」はその典型であり、その存否をめぐる議論は残されています。

活断層の存在を確実に知るためには、掘削調査や地下探査等の現地調査が今後必要です。また、基図として用いた 25,000 分の 1 地形図には 30 m 程度の誤差が許容されているため、本資料の活断層位置も少なくとも同様の誤差を持っています。これをデジタル化したデジタル情報にも当然その誤差が生じます。

本資料はこのような性格をもっております。本資料の利用目的及び方法については、利用者の判断と責任に委ねられており、事由の如何を問わず、データの利用に関して、利用者または第三者に生じた直接または間接の損害については、利用者がすべての責任を負うものとし、本県及び名古屋大学（及び作成協力研究者個人）は一切の責任を負いません。

なお、本資料の作成は、名古屋大学をはじめとする研究者が携わっており、研究的な知的所有権の一部は研究者にあることにも留意してください。資料の一部もしくは全部を無断複写することは、知的所有権の侵害に当たることがありますので、事前に岐阜県の担当課にご相談ください。なお、学術的な目的で本資料を引用する場合には、各資料に明記された引用法に従ってください。

## 5. 引用文献

- 池田安隆・今泉俊文・東郷正美・平川一臣・宮内崇裕・佐藤比呂志編，2002，第四紀逆断層アトラス，東京大学出版会，254p.
- 池田安隆・熊原康博・廣内大助・中田 高・岡田篤正，2006，1:25,000 都市圏活断層図「萩原」，国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 池田安隆・岡田篤正・後藤秀昭・東郷正美・中田 高，2007，1:25,000 都市圏活断層図「梓湖」，国土地理院技術資料 D・1-No.495.
- 岡田篤正・東郷正美編，2000，近畿の活断層，東京大学出版会，408p.
- 岡田篤正・鈴木康弘・中田 高，2003，1:25,000 都市圏活断層図「時又」，国土地理院技術資料 D・1-No.416.
- 岡田篤正・澤 祥・後藤秀昭・熊原康博・越後智雄・池田安隆，2006a，1:25,000 都市圏活断層図「白川」，国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 岡田篤正・中田 高・後藤秀昭・廣内大助・澤 祥，2006b，1:25,000 都市圏活断層図「坂下」，国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 岡田篤正・池田安隆・澤 祥・今泉俊文・八木浩司・平川一臣・鈴木康弘，2008，1:25,000 都市圏活断層図「高山東部」，国土地理院技術資料 D・1-No.519.
- 活断層研究会編，1991，新編日本の活断層，東京大学出版会，437p.
- 鈴木康弘・千田 昇・渡辺満久，1996a，1:25,000 都市圏活断層図「津島」，国土地理院技術資料 D・1-No.333.
- 鈴木康弘・千田 昇・渡辺満久・岡田篤正，1996b，1:25,000 都市圏活断層図「桑名」，国土地理院技術資料 D・1-No.333.
- 鈴木康弘・渡辺満久・岡田篤正，1996c，1:25,000 都市圏活断層図「名古屋北部」，国土地理院技術資料 D・1-No.333.
- 鈴木康弘・岡田篤正・熊原康博・東郷正美，2004，1:25,000 都市圏活断層図「瀬戸」，国土地理院技術資料 D・1-No.435.
- 鈴木康弘・池田安隆・後藤秀昭・東郷正美・宮内崇裕，2005，1:25,000 都市圏活断層図「大垣」，国土地理院技術資料 D・1-No.449.
- 堤 浩之・岡田篤正・後藤秀昭・澤 祥・杉戸信彦・東郷正美・宮内崇裕，2008，

- 1:25,000 都市圏活断層図「高山西南部」, 国土地理院技術資料 D・1-No.519.
- 中田 高・今泉俊文編, 2002, 活断層詳細デジタルマップ, 東京大学出版会, 68p+  
付図 2 葉+DVD-ROM2 枚.
- 中田 高・岡田篤正・池田安隆・廣内大助・越後智雄, 2006, 1:25,000 都市圏活  
断層図「下呂」, 国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 村松郁栄・松田時彦・岡田篤正, 2002, 濃尾地震と根尾谷断層帯ー内陸最大地震と  
断層の諸性質, 古今書院, 386p.
- 八木浩司・東郷正美・今泉俊文・堤 浩之・熊原康博・宮内崇裕・鈴木康弘, 2008,  
1:25,000 都市圏活断層図「高山西部」, 国土地理院技術資料 D・1-No.519.

## 6. 岐阜県の活断層に関する参考文献

岐阜県の活断層に関する文献について、地震調査研究推進本部の活断層長期評価に用いられた文献を以下にまとめ、加除を行った。

### [概説的資料]

- 岐阜県活断層研究会編, 2008, ひだ・みのの活断層を訪ねて, 岐阜新聞社, 201p.
- 飯田汲事, 1987, 天正地震, 名古屋大学出版会, 522p.
- 池田安隆・今泉俊文・東郷正美・平川一臣・宮内崇裕・佐藤比呂志編, 2002, 第四  
紀逆断層アトラス, 東京大学出版会, 254p.
- 池田安隆・熊原康博・廣内大助・中田 高・岡田篤正, 2006, 1:25,000 都市圏活  
断層図「萩原」, 国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 池田安隆・岡田篤正・後藤秀昭・東郷正美・中田 高, 2007, 1:25,000 都市圏活  
断層図「梓湖」, 国土地理院技術資料 D・1-No.495.
- 活断層研究会編, 1980, 日本の活断層ー分布図と資料ー, 東京大学出版会, 363p.
- 活断層研究会編, 1991, 新編日本の活断層, 東京大学出版会, 437p.
- 小井戸由光・佐々木嘉三, 1995, 岐阜県の活断層 [活断層図と解説], 岐阜県, 20p.

- 村松郁栄・松田時彦・岡田篤正, 2002, 濃尾地震と根尾谷断層帯—内陸最大地震と断層の諸性質, 古今書院, 386p.
- 中田 高・今泉俊文編, 2002, 活断層詳細デジタルマップ, 東京大学出版会, 68p+付図2葉+DVD-ROM2枚.
- 中田 高・岡田篤正・池田安隆・廣内大助・越後智雄, 2006, 1:25,000 都市圏活断層図「下呂」, 国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 岡田篤正・東郷正美編, 2000, 近畿の活断層, 東京大学出版会, 408p.
- 岡田篤正・鈴木康弘・中田 高, 2003, 1:25,000 都市圏活断層図「時又」, 国土地理院技術資料 D・1-No.416.
- 岡田篤正・澤 祥・後藤秀昭・熊原康博・越後智雄・池田安隆, 2006a, 1:25,000 都市圏活断層図「白川」, 国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 岡田篤正・中田 高・後藤秀昭・廣内大助・澤 祥, 2006b, 1:25,000 都市圏活断層図「坂下」, 国土地理院技術資料 D・1-No.458.
- 岡田篤正・池田安隆・澤 祥・今泉俊文・八木浩司・平川一臣・鈴木康弘, 2008, 1:25,000 都市圏活断層図「高山東部」, 国土地理院技術資料 D・1-No.519.
- 杉山雄一・栗田泰夫・吉岡敏和, 1994, 柳ヶ瀬—養老断層系ストリップマップ, 構造図10, 地質調査所.
- 鈴木康弘・千田 昇・渡辺満久, 1996a, 1:25,000 都市圏活断層図「津島」, 国土地理院技術資料 D・1-No.333.
- 鈴木康弘・千田 昇・渡辺満久・岡田篤正, 1996b, 1:25,000 都市圏活断層図「桑名」, 国土地理院技術資料 D・1-No.333.
- 鈴木康弘・渡辺満久・岡田篤正, 1996c, 1:25,000 都市圏活断層図「名古屋北部」, 国土地理院技術資料 D・1-No.333.
- 鈴木康弘・岡田篤正・熊原康博・東郷正美, 2004, 1:25,000 都市圏活断層図「瀬戸」, 国土地理院技術資料 D・1-No.435.
- 鈴木康弘・池田安隆・後藤秀昭・東郷正美・宮内崇裕, 2005, 1:25,000 都市圏活断層図「大垣」, 国土地理院技術資料 D・1-No.449.
- 佃 栄吉・栗田泰夫・山崎晴雄・杉山雄一・下川浩一・水野清秀, 1993, 阿寺断層系ストリップマップ, 構造図7, 地質調査所.

- 堤 浩之・岡田篤正・後藤秀昭・澤 祥・杉戸信彦・東郷正美・宮内崇裕, 2008,  
1:25,000 都市圏活断層図「高山西南部」, 国土地理院技術資料 D・1-No.519.
- 宇佐美龍夫, 2003, 最新版日本被害地震総覧[416]-2001, 東京大学出版会, 605p.
- 八木浩司・東郷正美・今泉俊文・堤 浩之・熊原康博・宮内崇裕・鈴木康弘, 2008,  
1:25,000 都市圏活断層図「高山西部」, 国土地理院技術資料 D・1-No.519.

## [研究論文等]

### (1) 跡津川断層

- 安藤雅孝, 1998, 活断層帯での地殻活動研究(地震フロンティア研究)概要, 月刊地球, 20, 127-132.
- 跡津川断層発掘調査団, 1983, 跡津川断層におけるトレンチ掘削調査(速報), 月刊地球, 5, 335-340.
- 跡津川断層発掘調査団, 1986, 1982年跡津川断層(野首地区)トレンチ調査, 活断層研究, 5, 59-64.
- 跡津川断層トレンチ発掘調査団, 1990, 跡津川断層のトレンチ調査地点でみられた小構造, 活断層研究, 8, 23-29.
- 跡津川断層トレンチ発掘調査団・岡田篤正・竹内 章・佃 為成・池田安隆・渡辺満久・平野信一・升本真二・竹花康夫・奥村晃史・神嶋利夫・小林武彦・安藤雅孝, 1989, 岐阜県宮川村野首における跡津川断層のトレンチ発掘調査, 地学雑誌, 98, 440-463.
- 土居 光・中山 武・加藤正明・和田安男・和田博夫・田中寅夫・三雲 健, 1986, 跡津川断層西端上(天生)における地磁気全磁力連続観測, 京都大学防災研究所年報, 29B-1, 77-84.
- Forster, Craig B., Caine, Jonathan Saul, and 山崎真一, 1998, 断層帯の構造と活断層における流体の流動様式, 月刊地球, 20, 165-171.
- 藤井昭二, 1965, 富山堆積盆地の第四系, 第四紀研究, 4, 40-41.
- 藤井昭二・相馬恒雄・後藤道治・神嶋利夫・清水正之・金子一夫・河野芳輝, 1992, 10万分の1 富山県地質図説明書, 富山県, 112-123.



- 藤井昭二・竹村利夫, 1979, 富山県とその周辺の活断層, 富山県地震対策基礎調査報告書, 39-72.
- 深井三郎, 1958a, 神通川及びその支流高原川の河岸段丘, 富山大学教育学部紀要, 6, 31-46.
- 深井三郎, 1958b, 有峰盆地とその地形発達史, 富山大学教育学部紀要, 6, 51-61.
- ハスバートル・竹内 章・迫垣内 薫・武部晃充・伊藤谷生・新見 健・木下博久・野原 壯, 2000, 跡津川断層系・茂住祐延断層の活動性, 月間地球, 号外 28, 113-118.
- Hashimoto, M. and Jackson, and David D., 1993, Plate Tectonics and Crustal Deformation Around the Japanese Islands, J. Geophys. Res., 98, 16,149-16,166.
- 平原和朗・安藤雅孝・細 善信・和田安男・中野健秀, 1998, GPS 観測から断層の動きを追う, 月刊地球, 20, 149-153.
- 磯見 博・野沢 保, 1957, 5 万分の 1 地質図幅「船津」および同説明書, 地質調査所, 1-43.
- 伊藤久男・西上鉄也・桑原保人, 1998, トラップ波から断層のつながりを追う, 月刊地球, 20, 154-159.
- 伊藤 潔・和田博夫・和田一成, 1998, 地震活動で断層の動きを追う, 月刊地球, 20, 136-141.
- 伊藤谷生・竹内 章・田中秀美・西川有司・迫垣内薫・岡田洋一, 1998, 活断層地下観測場・茂住祐延断層調査坑道 (速報), 月刊地球, 20, 182-187.
- 金折祐司・猪原芳樹・宮腰勝義・佐竹義典, 1981, 跡津川断層に伴う断層内物質の特性, 電力中央研究所報告, 381001, 1-38.
- 金折祐司・猪原芳樹・宮腰勝義・佐竹義典, 1983, 跡津川断層に伴う断層内物質 (その 2) - 粒度別鉱物組成及び化学組成 -, 電力中央研究所報告, 382050, 1-23.
- Kanaori, Y., Tanaka, K., and Miyakoshi, K., 1985, Further studies on the use of quartz grains from fault gouges to establish the age of faulting, Engineering Geology, 21, 175-194.
- 金折祐司・田中和広・宮腰勝義, 1986, 断層粘土中の石英粒子の表面構造 - その

- 4 跡津川断層における表面構造の分類と電子スピン共鳴法による絶対年代との対比, 電力中央研究所報告, 385016, 1-26.
- 金折祐司・矢入憲二・宮腰勝義, 1998, 跡津川断層北東部における花崗岩類の微小変形構造とその形成過程, 地質学雑誌, 94, 887-901.
- Kanaori, Y., Kawakami, S., and Yarii, K., The block structure and quaternary strikeslip block rotation of central Japan, *Tectonics*, 11, 47-56.
- 片川秀基・穴田文浩・吉田 進・伊藤 孝, 2002, 跡津川断層東端付近の最新活動時期について, 第四紀研究, 41, 73-83.
- 加藤正明, 1983, 跡津川断層における光波測量と地殻変動連続観測, 月刊地球, 5, 341-345.
- 加藤正明・土居 光・和田安男・三雲 健・田中寅夫・津嶋吉男・小泉 誠, 1979, 跡津川断層付近におけるボアホール型傾斜計による観測 (1), 京都防災研究所年報, 22B-1, 45-54.
- 河合正虎・野沢 保, 1958, 五万分の一地質図幅「東茂住」および同説明書, 地質調査所, 1-76.
- 川崎一郎・竹本 浩, 1983, 北陸地方における地震の発生様式, 月刊地球, 5, 377-383.
- 小池一之, 1978, 高原川・神通川に見られる段丘の分布とその形成過程, 駒沢地理, 14, 29-53.
- 河野芳輝, 1983, 中部日本北部の重力異常 (2) - 地形活動, 地震活動, 活断層, 構造との比較 -, 地震 2, 36, 247-253.
- 河野芳輝・加藤純子, 1983, 中部地方北部における重力異常と地形・活断層・地震活動, 月刊地球, 5, 388-393.
- 河野芳輝・岡田篤正・佃 為成, 1983, 概説・跡津川断層, 月刊地球, 5, 320-325.
- 熊木洋太, 1983, 跡津川断層周辺の活断層に関する二, 三の知見, 月刊地球, 5, 549-552.
- 京都大学防災研究所, 1983, 跡津川断層のトレンチ発掘調査, 地震予知連絡会会報, 30, 376-381.
- 京都大学防災研究所地震予知センター, 1995, 跡津川断層南西端付近の地震活動 (1993 年 11 月 23 日、M=4.4), 地震予知連絡会会報, 53, 598-601.

- 升本真二・竹花康夫, 1983,  $\gamma$ 線探査による跡津川断層, 月刊地球, 5, 436-440.
- 松田時彦, 1966, 跡津川断層の横ずれ変位, 地震研彙報, 44, 1179-1212.
- 松田時彦・恒石幸正, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日—被害地調査報告, 地震研彙報, 48, 1267-1279.
- 松田時彦・岡田篤正・藤田和夫, 1976, 日本の活断層分布図およびカタログ, 地質学論集, 12, 185-198.
- 三雲 健, 1983, 富山県内の地震による地震動予測に関する研究, 富山県地震対策基礎調査報告書, 1-30.
- 三雲 健・小泉 誠・和田博夫, 1985, 飛騨地方北部の地震活動:地震メカニズム及びテクトニクス, 地震2, 38, 25-40.
- 三雲 健・和田博夫, 1983, 跡津川断層と地震活動, 月刊地球, 5, 325-334.
- Mikumo, T., Wada, H., and Koizumi, M., 1987, Seismotectonics of the Hida region, central Honshu, Japan, Tectonophysics, 147, 95-119.
- 宮腰勝義・佐竹義典・猪原芳樹, 1982, 跡津川断層の分布・性状と活動性—断層露頭の調査と解析, 電力中央研究所報告, 381029, 1-169.
- 村田 析, 1912, 跡津の大断層, 地質学雑誌, 21, 206-208.
- 中山 武・下畑五夫, 1983, 跡津川断層における地電流観測, 月刊地球, 5, 352-358.
- 中山 武・加藤正明・土居 光・和田安男・三雲 健, 1986, 跡津川断層上(天生・宮川)における地電流の観測, 京都大学防災研究所年報, 29B-1, 67-76.
- 中山 武・酒井英男・小林 剛・加藤正明・三雲 健, 1991, 跡津川断層と阿寺断層における電磁気観測, 京都大学防災研究所年報, 34B-1, 351-363.
- 野沢 保, 1978, 跡津川断層最近の話題から, 地質ニュース, 283, 1, 28-36.
- 野沢 保・河田清夫・河合正虎, 1975, 飛騨古川地域の地質(5万分の1地質図幅), 地域地質研究報告, 地質調査所, 1-68.
- 野沢 保・坂本 亨, 1960, 5万分の1地質図幅説明書「五百石」, 地質調査所, 68p.
- 野沢 保・坂本 亨・加納 隆・稲月恒夫, 1981, 白木峰地域の地質, 地質調査所, 1-85.
- 岡田篤正・熊木洋太, 1983, 宮川の段丘と跡津川断層の変位, 月刊地球, 5, 411-416.

- 奥村晃史, 1996a, 富山県真川上流部における跡津川断層の露頭と真川湖成層, 第四紀露頭集—日本のテフラ, 252.
- 奥村晃史, 1996b, 跡津川断層・岐阜県宮川村野首地区トレンチ発掘調査, 第四紀露頭集—日本のテフラ, 259.
- 大久保義弘・古瀬慶博・河野芳輝, 1983, 跡津川断層周辺の重力異常と地殻構造, 月刊地球, 5, 425-430.
- 大久保義弘・古瀬慶博・河野芳輝, 1988, 跡津川断層周辺のブーケ異常と地殻構造, 地震 2, 41, 97-102.
- 酒井英男・広岡公夫, 1983, 古地磁気・岩石磁気からみた断層運動, 月刊地球, 5, 394-399.
- 坂本 亨, 1966, 富山積成盆地南半分の新生界とその構造発達史, 地質調査所報告, 213, 1-27.
- 佐竹 洋・林 美光, 1983, 跡津川断層・牛首断層における断層ガスの連続観測, 月刊地球, 5, 366-372.
- 佐竹 洋・大橋雅彦・水谷義彦, 1984, 跡津川断層・牛首断層における水素放出の同時性, 東京大学理学部地殻化学実験施設彙報, 3, 55-56.
- 佐竹 洋・田村正信, 1998, 地下水から見る断層周辺の水の動き, 月刊地球, 20, 160-164.
- 佐竹義典, 1987, 跡津川断層の変位計測, 電力中央研究所報告, U86023, 1-31.
- 佐竹義典・角田隆彦・宮腰勝義・金折裕司・猪原芳樹・田中和広・緒方 正, 1984, 中央構造線と跡津川断層の分布性状と活動性—地表調査と断層内物質分析による総合検討—, 電力中央研究所報告, 384017, 1-32.
- Sugimura, A., and Matsuda, T., 1965, Atera fault and its displacement vectors, Geol. Soc. Amer. Bull., 76, 509-522.
- 多田 堯, 1998, 跡津川断層における地殻変動, 月刊地球, 20, 142-148.
- 竹花康夫・升本真二, 1983, 跡津川断層における $\gamma$ 線の測定, 地震 2, 36, 259-262.
- 竹村利夫, 1980, 新たに確認または推定された活断層, 富山県地震対策基礎調査報告書, 12-22.
- 竹村利夫, 1983, 富山県の活断層, 月刊地球, 5, 431-436.

- 竹村利夫・藤井昭二, 1984, 飛騨山脈北縁部の活断層群, 第四紀研究, 22, 297-312.
- 竹内 章, 1983, 跡津川断層のルーツ, 月刊地球, 5, 373-377.
- 竹内 章, 1998, 跡津川断層と茂住祐延断層, 月刊地球, 20, 133-136.
- Takeuchi A., Hasbaator O., and Takebe A., 2003, Recurrence interval of big earthquakes along the Atotsugawa fault system, central Japan: Results of seismo-geological survey, Geophys. Res. Lett., 30, 8011, doi:10.1029/2002GL014957.
- 竹内 章・酒井英男, 1985, 跡津川断層における最近の活動イベントー古地磁気学的手法による断層の年代測定ー, 活断層研究, 1, 67-74.
- 竹内 章・和田博夫・三雲 健・神嶋利夫・中村俊夫・酒井英男, 1990, 跡津川断層縦走, 日本地質学会第 97 年見学旅行案内書, 85-110.
- 田中和広・金折裕司・宮腰勝義・池谷元伺・三木俊克, 1981, 電子スピン共鳴測定法による跡津川断層の活動年代測定の試み, 月刊地球, 3, 505-509.
- 田中和広・金折裕司・宮腰勝義, 1984, 電子スピン共鳴測定法による跡津川断層の活動年代測定の試み (その 2), 月刊地球, 6, 235-257
- 田中寅夫・細 善信・土居 光・加藤正明・小泉 誠・和田安男, 1977, 跡津川断層における光波測量 (第 1 報), 京都大学防災研究所年報, 20B-1, 69-75.
- 東郷正美・岡田篤正, 1983, 断層変位からみた跡津川断層, 月刊地球, 5, 359-366.
- 辻村太郎, 1926a, 飛騨山脈の北端における断層崖の一形式, 地理学評論, 2, 679-695.
- 辻村太郎, 1926b, 活断層の性質ならびに日本島一部の地形学的断層構造 (予報), 地理学評論, 2, 192-218.
- 佃 為成, 1983, 跡津川断層の微小地震, 月刊地球, 5, 417-425.
- Tsukuda, T., 1985, Long-term seismic activity and present microseismicity on active faults in Southwest Japan, Earthq. Predict. Res., 3, 253-284.
- 宇佐美龍夫・東京大学・資料編纂所・京都大学上宝地殻変動観測所, 1979, 飛越地震 (安政 5 年 2 月 26 日) と跡津川断層, 地震予知連絡会会報, 21, 115-119.
- 宇津井啓高・竹村幸子, 1984, 日本海中部地震における跡津川断層からのラドン放出, 東京大学理学部地殻科学実験施設彙報, 3, 57-59.
- 和田博夫, 1975, 跡津川断層付近における微小地震活動第二報, 地震 2, 28, 113-124.

- 和田博夫・岸本兆方, 1974, 跡津川断層付近における微小地震活動第一報, 地震 2, 27, 1-9.
- 和田博夫・伊藤 潔, 1995, 跡津川断層付近の地震活動, 京都大学防災研究所年報, 38B-1, 235-250.
- 和田博夫・三雲 健・小泉 誠, 1983, 飛騨地方特に跡津川断層付近の地震活動と発震機構, 地震 2, 32, 281-296.
- 渡辺邦彦, 1983, 微小地震活動とその周辺—跡津川断層を眺めて—, 月刊地球, 5, 404-410.
- 山田淳夫・竹内 章, 1983, 跡津川断層東端の断層露頭, 月刊地球, 5, 399-404.
- 山沢金五郎, 1929, 安政五年 2 月 26 日の飛騨角川大地震に就て, 地震, 1, 125-128.

## (2) 高山大原断層帯

- 岐阜県, 1999, 平成 10 年度地震関係基礎調査交付金高山・大原断層帯に関する調査成果報告書, 岐阜県.
- 岐阜県, 2000, 平成 11 年度地震関係基礎調査交付金高山・大原断層帯に関する調査成果報告書, 岐阜県.
- 岐阜県, 2001, 平成 12 年度地震関係基礎調査交付金高山・大原断層帯に関する調査成果報告書, 岐阜県.
- 垣見俊弘 (1983) : 日本内陸の活断層と被害地震の地域的相関. 地質調査所月報, 34, 295-309.
- Kanai, K., and Osada, K., 1961, Seismic Characteristics in Ground of Mountainous Formation (Observation of the After Shocks of the Kita Mino Earthquake), Bull. Earthq. Res. Inst., 39, 943-951.
- 鹿野勘次, 1979, 高山市南方の“江名子断層”, 岐阜県高校教育, 15, 35-46.
- Kishinouye, F., and Onda, I, 1961, Field Studies of the Kita Mino Earthquake on August 19, 1961, Bull. Earthq. Res. Inst., 39, 857-868.
- 河田清雄, 1982, 三日町地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 72p.
- 松田時彦, 1966, 跡津川断層の横ずれ変位, 地震研究所彙報, 44, 1179-1212.

松田時彦, 1968, 活断層・活褶曲の tectonophysics, 災害科学の研究成果とその問題, 132-166.

松田時彦・恒石幸正, 1970, 岐阜県中部地震－1969年9月9日－被害地調査報告, 地震研究所彙報, 48, 1267-1279.

長橋良隆・里口保文・吉川周作, 2000, 本州中央部における鮮新－更新世の火砕流堆積物と広域火山灰層との対比および層位噴出年代, 地質学雑誌, 106, 51-69.

森本良平・松田時彦, 1961, 北美濃地震被害地の地質第1報福井県打波川上流～岐阜県石徹白川上流地域, 地震研究所彙報, 39, 935-942.

恒石幸正, 1976, 岐阜県中部地震に関連した断層, 地質学論集, 12, 129-137.

山田直利・足立 守・梶田澄雄・原山 智・山崎晴雄・豊 遥秋, 1985, 高山地域の地質, 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 111p.

### (3) 牛首断層

藤井昭二・竹村利夫, 1979, 富山県とその周辺の活断層, 富山県地震対策基礎調査報告書, 39-72.

池田安隆, 2003, 中部日本における活断層の発現時期はなぜ新しいのか?, 月刊地球, 25, 907-917.

今村明恒, 1929, 安政五年二月二十六日飛騨越中加賀越前地方大地震に関する史料, 地震, 1, 143-159.

河合正虎・野沢 保, 1958, 5万分の1地質図幅説明書「東茂住」, 地質調査所, 76p.

松田時彦, 1966, 牛首断層の横ずれ変位, 地震研究所彙報, 44, 1179-1212.

松田時彦, 1968, 活断層・活褶曲の tectonophysics, 災害科学の研究成果とその問題, 132-166.

松田時彦・藤田和夫・岡田篤正, 1976, 日本の活断層分布図およびカタログ, 地質学論集, 12, 185-198.

宮下由香里・吉岡敏和・桑原拓一郎・荻谷愛彦・松浦一樹・吉村実義・高瀬信一, 2003a, 牛首断層南西部地域の活動履歴調査(1)－地形地質調査結果－, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査総合センター, No.3, 47-62.

- 宮下由香里・吉岡敏和・桑原拓一郎・荻谷愛彦・藤田浩司・千葉達朗, 2003b, 牛首断層南西部地域の活動履歴調査(2)ートレンチ調査結果(速報)ー, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査総合センター, No.3, 63-71.
- 宮下由香里・吉岡敏和・桑原拓一郎・斎藤 勝・小林健太・狩谷愛彦・藤田浩司・千葉達朗, 2004a, 牛首断層南西部地域の活動履歴調査(3)ー牛首, 水無トレンチ調査ー, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査総合センター, No.4, 113-130.
- 宮下由香里・吉岡敏和・桑原拓一郎・二階堂 学・高瀬信一・橘 徹, 2004b, 牛首断層北東部地域の活動履歴調査ー上白木峰トレンチ調査結果ー, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査総合センター, No.4, 131-142.
- 野沢 保, 1960, 5 万分の 1 地質図幅説明書「五百石」, 地質調査所 68p.
- 野沢 保, 1978, 跡津川断層最近の話題から, 地質ニュース, 283, 28-36.
- 野沢 保・河田清雄・河合正虎, 1975, 飛騨古川地域の地質, 地域地質研究報告(5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 79p.
- 野沢 保・坂本 亨・加納 隆・稲月恒夫, 1981, 白木峰地域の地質, 地域地質研究報告(5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 85p.
- 坂本 亨, 1966, 富山積成盆地南半部の新生界とその構造発達史, 地質調査所報告, 213, 27p.
- 佐竹 洋・林 美光, 1983, 跡津川断層・牛首断層における断層ガスの連続観測ー炭酸ガス, 水素についてー, 月刊地球, 5, 366-372.
- 佐竹 洋・大橋雅彦・水谷義彦, 1984, 跡津川断層・牛首断層における水素放出の同時性, 東京大学理学部地殻化学実験施設彙報, 3, 55-56.
- 竹村利夫, 1980, 新たに確認または推定された活断層, 富山県地震対策基礎調査報告書, 12-22.
- 竹村利夫, 1983, 富山県の活断層, 月刊地球, 5, 431-436.
- 竹村利夫・藤井昭二, 1984, 飛騨山脈北縁部の活断層群, 第四紀研究, 22, 297-312.
- 竹内 章, 1983, 牛首断層のルーツ, 月刊地球, 5, 373-376.
- 竹内 章, 1998, 牛首断層と茂住祐延断層, 月刊地球, 20, 133-136.
- Takeuchi, A., 1999, Results of Excavation Survey on the Mozumi-Sukenobu



Fault of the Atotsugawa Fault System, Central Japan, Eos Trans. AGU, 80, F748.

Takeuchi, A., Hasbaator, O., and Takebe, A., 2003, Recurrence interval of big earthquakes along the Atotsugawa fault system, central Japan: Results of seismo-geological survey. Geophys. Res. Lett., 30, 8011-8011.

辻村太郎, 1926, 断層谷の性質並びに日本島一部の地形的断層構造(予報)二, 地理学評論, 2, 192-218.

和田博夫・伊藤 潔, 1995, 牛首断層付近の地震活動, 京都大学防災研究所年報, 38, B-1, 235-250.

#### (4) 御母衣断層系

青木治三・伊藤 潔・多田 堯・藤井 巖・山内常生・伊神 輝, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日—の余震観測, 地震研究所彙報, 48, 1181-1194.

廣田孝一, 1962, ダムの基礎岩盤, 土木学会, 287-322.

岐阜県高等学校地学研究教育, 1995, 帰雲山の大崩壊, アースウォッチングイン岐阜, 78p.

萩原尊礼・茅野一郎, 1961, 1961年8月19日北米濃地震とその余震観測概説, 地震研究所彙報, 39, 873-879.

伯野元彦, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日—による被害調査報告, 地震研究所彙報, 48, 1287-1294.

地震研究所余震観測班, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日—の余震観測, 地震研究所彙報, 48, 1155-1163.

梶田澄雄, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日—の地震域の地質, 地震研究所彙報, 48, 1281-1286.

神沼克伊, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日—の余震の震源精度, 地震研究所彙報, 48, 1165-1180.

Kanai, K., and Osada, K., 1961, Seismic Characteristics in Ground of Mountainous Formation (Observation of the After Shocks of the Kita Mino Earthquake), Bull. Earthq. Res. Inst., 39, 943-951.

- Kanaori, Y., Kawakami, S., and Yairi, K., 1992, The block structure and Quaternary strike slip block rotation of central Japan, *Tectonics*, 11, 47-56.
- 狩野謙一・恒石幸正・上杉 陽・伊藤谷生, 1980, リニアメントと断層 (その 2) —地質調査からみた 2・3 の実例—, 自然災害科学総合シンポジウム講演会論文集, 17, 397-400.
- Kawasaki I., 1975, The Focal Process of the Kita-Mino Earthquake of August 19, 1961, and its Relationship to a Quaternary Fault, the Hatogayu-Koike Fault, *Jour. Phys. Earth*, 24, 227-250.
- 河田晴雄, 1982, 三日町地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 72p.
- 河田晴雄・磯見 博・杉山雄一, 1988, 萩原地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 122p.
- 国土地理院測地部, 1980, 白山地方の水平歪, 地震予知連絡会会報, 24, 181-183.
- 河野芳輝, 1983, 中部日本北部の重力異常 (2) —地形, 地震活動, 活断層, 構造線との比較—, *地震*, 36, 247-253.
- 熊本洋太, 1983, 跡津川断層周辺の活断層に関する二・三の知見, *月刊地球*, 5, 549-552.
- Kishinouye F., and Okada I., 1961, Field Studies of the Kita Mino Earthquake on August 19, 1961, *Bull. Earthq. Res. Inst.*, 39, 857-868.
- 京都大学防災研究所, 1987a, 中部地方北西部 (飛騨地方北部, 富山湾及び能登半島周辺) の地震活動 (1986 年 1 月-6 月), 地震予知連絡会会報, 37, 305-310.
- 京都大学防災研究所, 1987b, 中部地方北西部 (飛騨地方北部, 富山湾及び能登半島周辺) の地震活動 (1986 年 7 月-12 月). 地震予知連絡会会報, 38, 410-413.
- 松田時彦, 1966, 跡津川断層の横ずれ変位, *地震研究所彙報*, 44, 1179-1212.
- 松田時彦・恒石幸正, 1970, 岐阜県中部地震—1969 年 9 月 9 日—被害地調査報告, *地震研究所彙報*, 48, 1267-1279.
- Mikumo, T., 1973, Faulting mechanism of the Gifu earthquake of September 9, 1969, and some related problems, *Jour. Phys. Earth*, 21, 191-212.
- 三雲 健・小泉 誠・和田博夫, 1985, 飛騨地方北部の地震活動, 地震メカニズム

- 及びテクトニクス, 地震 2, 38, 25-40.
- 宮村攝三・堀 実・安芸敬一・松本英照・安藤誠一, 1961, 北美濃地震余震観測－岐阜県八幡町における観測－, 地震研究所彙報, 39, 895-908.
- 森本良平・松田時彦, 1961, 北美濃地震被害地の地質第 1 報福井県打波川上流～岐阜県石徹白川上流地域, 地震研究所彙報, 39, 935-942.
- 村井 勇, 1970, 岐阜県中部地震－1969 年 9 月 9 日－の地震地域およびその周辺の地質構造, 地震研究所彙報, 48, 1251-1266.
- 村井 勇・津屋弘達, 1961, 北美濃地方の地質構造に関する 2, 3 の問題, 地震研究所彙報, 39, 909-934.
- 野沢 保・河田晴雄・河合正虎, 1975, 飛騨古川地域の地質 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 79p.
- 岡山俊雄, 1956, 柳ガ瀬断層と敦賀湾伊勢湾線, 駿台史学, 7, 75-101.
- 表 俊一郎・唐鎌郁夫・中島直吉・斎藤貞夫・茅野一郎, 1961, 北美濃地震余震観測－勝原及び蛭ヶ野における観測, 地震研究所彙報, 39, 881-894.
- 大沢 胖, 1961, 北美濃地震における家屋の被害について, 地震研究所彙報, 39, 869-872.
- 佐々木嘉三・渡辺憲治・日比一重・村松郁栄, 1970, 岐阜県中部地震－1969 年 9 月 9 日－の余震観測, 地震研究所彙報, 48, 1209-1216.
- 杉山雄一・栗田泰夫・佃 栄吉, 1991, 御母衣断層系の完新世断層活動と 1586 年天正地震－トレンチ掘削調査による検討－, 地震 2, 44, 283-295.
- 杉山雄一・栗田泰夫・佃 栄吉, 1993a, 1990 年御母衣断層系・三尾河断層 (寺河戸地区) トレンチ調査, 活断層研究, 11, 71-77.
- 杉山雄一・栗田泰夫・佃 栄吉, 1993b, 1990 年御母衣断層系・白川断層 (木谷地区) トレンチ調査, 活断層研究, 11, 65-70.
- 竹村利夫・藤井昭二, 1984, 飛騨山地北縁部の活断層群, 第四紀研究, 22, 297-312.
- 恒石幸正, 1976, 岐阜県中部地震に関連した断層, 地質学論集, 12, 129-137.
- 歌田 実・恒石幸正 (1980) : 岐阜県下の二三の断層に伴う“断層粘土”について, 自然災害科学総合シンポジウム講演論文集, 17, 401-404.
- 脇田浩二・小井土由光, 1994, 下呂地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地

質図幅), 地質調査所, 79p.

脇田浩二, 1995, 美濃地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 36p.

渡辺 晃・黒磯章夫, 1970, 岐阜県中部地震—1969 年 9 月 9 日—の余震について, 地震研究所彙報, 48, 1195-1208.

山田直利・足立 守・梶田澄雄・原山 智・山崎晴雄・豊 遙秋, 1985, 高山地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 111p.

山田直利・小林武彦, 1988, 御嶽山地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 136p.

#### (5) 阿寺断層帯

栗田泰夫, 1988, 1985 年阿寺断層 (馬籠地区) トレンチ調査, 活断層研究, 5, 50-54.

栗田泰夫・佃 栄吉・山崎晴雄・水野清秀, 1986, 阿寺断層の最近の活動史—加子母・付知・坂下・山口におけるトレンチ発掘調査から—, 第 2 回阿寺断層現地シンポジウム報告集, 1-11.

栗田泰夫・佃 栄吉・杉山雄一, 1993, 1990 年阿寺断層系・湯ヶ峰断層 (乗政地区) トレンチ調査, 活断層研究, 11, 78-81.

地質調査所, 1982, 阿寺断層のトレンチ発掘調査, 地震予知連絡会会報, 28, 299-303.

地質調査所, 1986, 阿寺断層の第 2 次トレンチ発掘調査, 地震予知連絡会会報, 36, 157-163.

彦坂六男・吉田和夫, 1978, 阿寺断層を抜く—中呂発電所放水路トンネル—, トンネルと地下, 9, 481-487.

平野信一, 1981, 阿寺断層の第四紀後期の断層活動と地震発生予測, 月刊地球, 3, 250-257.

Hirano, S., 1982, The Atera Fault and Its Prehistoric Activities - A Geomorphic Method for Earthquake Prediction, Sci. Rep. Tohoku Univ., 7th Ser., 32, 109-125.

平野信一・中田 高, 1981, 阿寺断層に沿う第四紀後期の断層変位から推定した地

- 震活動, 地理学評論, 54, 231-246.
- 廣内大助・安江健一・奥村晃史・海津正倫・内田主税・谷口 薫・阿寺断層調査グループ, 2002, 阿寺断層系下呂断層の古地震調査, 後氷期自然環境変遷の広域的高精度時代対比のための基礎的研究 (課題番号 11308002 : 研究代表者 奥村晃史), 平成 11-13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 A) 研究成果報告書, 31-37.
- 廣内大助・安江健一・奥村晃史・海津正倫・内田主税・平松孝晋, 2003, 阿寺断層系中北部, 下呂断層の古地震活動時期, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XIV, 118-124.
- 廣内大助・安江健一・内田主税・平松孝晋, 2004a, 阿寺断層系湯ヶ峰断層の古地震と 14C 年代, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XV, 144-150.
- 廣内大助・安江健一・内田主税・平松孝晋・奥村晃史・海津正倫, 2004b, 阿寺断層系中北部, 下呂断層の古地震活動時期 (2), 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XV, 151-156.
- 伊神 輝・安久 勉・青木治三, 1972, 阿寺断層沿いの低い地震活動, 地震 2, 25, 232-242.
- 飯田汲事, 1980, 天正地震 (1586 年) 及び濃尾地震 (1891 年) の規模と震害, 自然災害科学シンポジウム講演論文集, 17, 643-644.
- 岩田 修, 1983, 萩原町の地形的特徴, 岐阜県地学教育, 19, 32-42.
- 片田正人・河田晴雄・坂本 享・山田直利・村山正郎・磯見 博, 1961, 20 万分の 1 地質図「飯田」, 地質調査所.
- 貝塚爽平・木曾敏行・町田 貞・太田陽子・吉川虎雄, 1964, 木曾川・矢作川流域の地形発達, 地理学評論, 37, 89-102.
- 金折裕司・矢入憲二・川上紳一・服部俊之, 1993, 1586 年天正地震の震央に関する一考察: 濃尾平野の発掘遺跡に認められた液状化跡, 地震 2, 46, 143-147.
- 加子母村史編纂委員会, 1972, 加子母村史, 加子母村教育委員会, 734p.
- 河田清雄・磯見 博・杉山雄一, 1988, 萩原地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 122p.
- 木股文昭・安藤米蔵・青山昌三・小幡隆徳・志津匡三・渡辺清隆, 1989, 阿寺断層における水準測量による傾斜変動の観測 (1976-1987), 地震 2, 42, 311-316.

- 木曾谷第四紀研究グループ, 1964, 岐阜県坂下町における阿寺断層による段丘面の転移, 第四紀研究, 3, 153-166.
- Matsuda, T., 1977, Estimation of future destructive earthquake from active faults on land in Japan, J. Phys. Earth, 5, 251-260.
- 松田時彦・藤田和夫・岡田篤正, 1976, 日本の活断層分布図およびカタログ, 地質学論集, 12, 185-198.
- 松田時彦・岡田篤正, 1968, 活断層, 第四紀研究, 7, 188-199.
- 松田時彦・恒石幸正, 1970, 岐阜県中部地震—1969年9月9日被害地調査報告, 地震研究所彙報, 48, 1267-1279.
- 松田時彦・太田陽子・岡田篤正・清水文健・東郷正美, 1977, 空中写真による活断層の認定と実例, 地震研究所彙報, 52, 461-496.
- 森山昭雄, 1985, 恵那・中津川盆地の地形発達史, 愛知教育大学研究報告(自然科学編), 34, 1-15.
- 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曾谷第四紀巡検会, 1992, 岐阜県八百津町の木曾谷泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器<sup>14</sup>C年代, 第四紀研究, 31, 29-36.
- 日本第四紀学会第四紀露頭集編集委員会編, 1996, 第四紀露頭集—日本のテフラ, 日本第四紀学会, 352p.
- 岡田篤正, 1975, 阿寺断層中北部, 舞台峠周辺の地形発達と断層変位地形, 地理学評論, 48, 72-78.
- 岡田篤正, 1981, 活断層としての阿寺断層, 月刊地球, 3, 372-382.
- 岡田篤正, 1988, 1986年阿寺断層系・萩原断層(乗政地区)トレンチ調査, 活断層研究, 5, 65-70.
- 岡田篤正・松田時彦, 1976, 岐阜県南部, 小野沢峠における阿寺断層の露頭と新期断層運動, 地理学評論, 49, 632-639.
- 岡田篤正・粟田泰夫・奥村晃史・東郷正美, 1987, トレンチ掘削調査による阿寺断層系萩原断層の活動時期と間隔の解明, 地学雑誌, 96, 22-325.
- 岡山俊雄, 1930, 中央日本山地の接峰面及び区分, 地理学評論, 6, 479-499.
- 岡山俊雄, 1966, 坂下断層崖—阿寺断層の最近の運動—, 駿台史学, 18, 34-56.

- 酒井潤一, 1981, 坂下町の上部更新統と阿寺断層, 月刊地球, 3, 200-204.
- 佐々木嘉三, 1981, 坂下町相沢における阿寺断層の構造, 月刊地球, 3, 228-231.
- 杉村 新, 1973, 大地の動きをさぐる, 岩波書店, 236p.
- Sugimura, A., and Matsuda, T., 1965, Atera fault and its displacement vectors, Geol. Soc. Am. Bull., 76, 509-522.
- 竹本弘幸・百瀬 貢・平林 潔・小林武彦, 1987, 新期御岳テフラ層の層序と時代—中部日本における編年上の意義—, 第四紀研究, 25, 337-352.
- The Quaternary Research Group of the Kiso Valley, and Kigoshi, K., 1964, Radiocarbon date of the Kisogawa volcanic mudflows and its significance on the wurmian chronology of Japan, Earth Sci., 71, 1-7.
- 遠田晋次・井上大栄・高瀬信一・久保内明彦・富岡伸芳, 1994, 阿寺断層の最新活動時期: 1586年天正地震の可能性, 地震 2, 47, 73-77.
- 遠田晋次・井上大栄・久保内明彦・高瀬信一・二階堂 学, 1995, 阿寺断層の活動と1586年天正地震: 小郷地区, 青野原地区, 伝田原地区トレンチ掘削調査, 地震 2, 48, 401-421.
- 遠田晋次・井上大栄・宮腰勝義, 1996a, 阿寺断層系の完新世における断層活動(その1)—中南部の活動と最新活動時期について—, 電力中央研究所報告, U95059, 32p.
- 遠田晋次・井上大栄・宮腰勝義, 1996b, 阿寺断層系の完新世における断層活動(その2)—北部の活動およびセグメンテーションモデル—, 電力中央研究所報告, U95060, 42p.
- 辻村太郎, 1926, 断層谷の性質並びに日本島一部の地形学的断層構造(予報)(一), (二), 地理学評論, 2, 130-152, 192-218.
- Tsukuda, E., and Yamazaki, H., 1984, Excavation survey of active faults for earthquake prediction in Japan - with special reference to the Ukihashi central fault and the Atera fault, Geol. Surv. Jpn. Rep., 263, 349-361.
- 佃 栄吉, 1988, 1985年阿寺断層(坂下地区)トレンチ調査, 活断層研究, 5, 55-59.
- 佃 栄吉・山崎晴雄, 1986, 1981年阿寺断層(倉屋地区)トレンチ調査, 活断層

- 研究, 3, 37-43.
- 津沢正晴, 1981, 付知川沿岸の段丘, 月刊地球, 13, 232-236.
- 脇坂安彦・阿部昌彦, 1988, 第四紀断層の地形と地質 (1), 土木研究所資料, 237p.
- 山田直利, 1978a, 阿寺断層を追って (その 1) - 恵那山トンネルから付知まで -, 地質ニュース, 283, 37-49.
- 山田直利, 1978b, 阿寺断層を追って (その 2) - 付知から飛騨川まで -, 地質ニュース, 284, 30-36.
- 山田直利, 1981, 阿寺断層 - その地質学的背景 -, 月刊地球, 3, 237-243.
- 山田直利・村山正郎, 1958, 5 万分の 1 地質図幅「妻籠」及び説明書, 地質調査所, 31p.
- 山田直利・柴田 賢・佃 栄吉・内海 茂・松本哲一・高木秀雄・赤羽久忠, 1992, 阿寺断層周辺地域の諸岩石の放射年代と断層運動の時期, 地調月報, 43, 759-779.
- 山田直利・須藤定久・垣見俊弘, 1976, 阿寺断層周辺地域の地質図, 地質調査所.
- 山崎晴雄, 1988, 1985 年阿寺断層 (小和知地区) トレンチ調査, 活断層研究, 5, 60-64.
- Yasue K., 2000, When did the Atera fault start its present activity?, Active Fault Research for the New Millenium, Proceedings of the HOKUDAN International Symposium and School on Active Faulting, 561-562.
- 安江健一・廣内大助, 2000, 長野県山口村, 木曾川左岸における阿寺断層の露頭と活動, 活断層研究, 19, 63-68.
- 安江健一・廣内大助, 2002, 阿寺断層系中北部の第四紀後期における活動性と構造発達様式, 第四紀研究, 41, 347-359.

#### (6) 屏風山断層

- 阿部信太郎・宮腰勝義・井上大榮, 1999, GPR と反射法地震探査を併用した活断層調査, 地質ニュース, 538, 7-11.
- 愛知県, 1999, 平成 10 年度地震関係基礎調査交付金猿投山断層帯に関する調査成果報告書, 148 p.
- 有井琢磨, 1958, 岐阜県岩村町付近の断層地形, 新地理, 7, 110-121.



- 岐阜県, 1970), 岐阜県地質鉱産図概説, 109p.
- 岐阜県, 2000, 平成 11 年度地震関係基礎調査交付金屏風山・恵那山断層帯に関する調査成果報告書, 164 p.
- 岐阜県, 2001, 平成 12 年度地震関係基礎調査交付金屏風山・恵那山断層帯に関する調査成果報告書, 164 p.
- 岐阜県, 2002, 平成 13 年度地震関係基礎調査交付金屏風山・恵那山断層帯に関する調査成果報告書, 118 p.
- 貝塚爽平・木曾敏行・町田 貞・太田陽子・吉川虎雄, 1964, 木曾川・矢作川流域の地形発達—現地シンポジウムにおける試論と今後の課題—, 地理学評論, 37, 89-102.
- 河田清雄, 1959, 5 万分の 1 地質図幅「付知」及び同説明書, 69 p.
- 桑原 徹, 1971, 瀬戸層群の堆積相, 竹原平一教授記念論文集, 113-128.
- 桑原 徹, 1975, 濃尾傾動盆地と濃尾平野, アーバンクボタ, 11, 18-25.
- 木曾敏行, 1959, 恵那盆地の地形発達について, 地理学評論, 32, 365-373.
- 木曾敏行, 1963, 木曾川流域の地形発達, 地理学評論, 36, 87-109.
- 木宮一邦, 1971, 三河高原に分布する明智礫層岩層について, 地質学雑誌, 77, 365-374.
- 森山昭雄, 1985, 恵那・中津川盆地の地形発達史, 愛知教育大学研究報告, 34, 1-15.
- 森山昭雄, 1987, 木曾川・矢作川流域の地形と地殻変動, 地理学評論, 60, 67-92.
- 森山昭雄, 1989, 木曾川上流域の山地地形と地殻変動, 愛知教育大学研究報告, 38, 1-19.
- 森山昭雄, 1990, 中部山岳地域における山地形成の時代性—山はいつ高くなったか?—, 米倉伸之・岡田篤正・森山昭雄編, 変動地形とテクトニクス, 古今書院, 87-109.
- 森山昭雄・丹羽正則, 1985, 土岐面・藤岡面の対比と土岐面形成に関連する諸問題, 地理学評論, 58, 275-294.
- 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曾谷第四紀巡検会, 1992, 岐阜県八百津町の木曾川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器  $^{14}\text{C}$  年代, 第四紀研究, 31,

29-36.

- 中山勝博, 1985, 岐阜県土岐市における瀬戸層群の堆積盆地, 地団研専報, 29, 119-129.
- 岡田篤正, 1979, 愛知県の地質・地盤(その4)〔活断層〕—愛知県とその周辺における活断層と歴史地震—, 愛知県防災会議地震部会, 122 p.
- 岡田篤正・牧野内猛・鈴木康弘, 2002, 愛知県の活断層(その1)活断層文献調査研究—概要と評価—, 愛知県防災会議地震部会, 117 p.
- 田中俊行・青木治三・大下賢一・石川昌幹・野崎京三・大西正純, 2001, 恵那山断層オーバーステップ域の基盤構造, 地震, 54, 319-330.
- 竹本弘幸・百瀬 貢・平林 潔・小林武彦, 1987, 新期御岳テフラ層の層序と時代—中部日本における編年上の意義—, 第四紀研究, 25, 337-352.
- 陶土団体研究グループ, 1982, 岐阜県瑞浪市南部の瀬戸層群—瀬戸層群の堆積盆地の発生—発展に関する研究(2)—, 地団研専報, 24, 143-155.
- 陶土団体研究グループ, 1994a, 岐阜県恵那市周辺の瀬戸層群, 地球科学, 48, 1-15.
- 陶土団体研究グループ, 1994b, 上部新生界第二瀬戸内累層群における堆積盆地のブロック運動—岐阜県恵那盆地の例—, 地球科学, 48, 17-29.
- 陶土団体研究グループ, 1999, 断層境界を伴う多数の基盤ブロックからなる内陸盆地—岐阜県多治見市周辺の東海層群堆積盆地の例—, 地球科学, 53, 291-306.
- 辻村太郎, 1942, 断層地形論考, 古今書院, 397p.
- 宇都浩三・山田直利, 1985, 岐阜県坂下町上野玄武岩および高山市南方の玄武岩溶岩の K-Ar 年代, 地質調査所月報, 36, 47-52.
- 山田直利・柴田 賢・佃 栄吉・内海 茂・松本哲一・高木秀雄・赤羽久忠, 1992, 阿寺断層周辺地域の火成岩類の放射年代と断層運動の時期, 地質調査所月報, 43, 759-779.
- 吉川虎雄, 1961, 木曾川の河岸段丘—御岳火山と濃尾平野の地形発達との関連を中心として—, 辻村太郎先生古稀記念地理学論文集, 70-87.
- 吉川虎雄・杉村 新・貝塚爽平・太田陽子・阪口 豊, 1973, 新編日本地形論, 東京大学出版会, 415p.
- 財団法人地震予知総合研究振興会, 2000, 屏風山断層調査研究委員会報告書, 東濃

地震科学研究所報告, 5, 134p.

(7) 長良川断層帯

岐阜県, 1997, 平成8年度地震関係基礎調査交付金長良川上流断層帯に関する調査  
成果報告書.

飯田汲事, 1980, 天正地震(1586年)及び濃尾地震(1891年)の規模と震害,  
自然災害科学シンポジウム講演論文集, 17, 643-644.

加藤碩一・杉山雄一, 1985, 1:500,000 活構造図「金沢」, 地質調査所.

垣見俊弘・衣笠善博・加藤碩一, 1978, 1:2,000,000 地質編集図18日本活断層図,  
地質調査所.

松田時彦・恒石幸正, 1970, 岐阜県中部地震-1969年9月9日-地震被害調査報  
告, 地震研究所彙報, 1267-1279.

森本良平・松田時彦, 1961, 北美濃地震被害地の地質第1報福井県打波川上流～岐  
阜県石徹白川上流地域, 地震研究所彙報, 39, 935-942.

白鳥町企画振興課, 1996, 活断層調査委託報告書.

東郷正美・佐藤 豊, 1988, 横ずれ谷地形を用いた活断層の活動度評価について,  
法政大学多摩研究報告, 3, 41-60.

辻村太郎, 1932, 東北日本の断層盆地(上), 地理学評論, 24, 211-212.

恒石幸正, 1976, 岐阜県中部地震に関連した断層, 地質学論集, 12, 129-137.

脇田浩二, 1984, 八幡地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図福), 地  
質調査所, 1-89.

(8) 濃尾断層帯

栗田泰夫・苅谷愛彦・奥村晃史, 1999, 古地震調査にもとづく1891年濃尾地震断  
層系のセグメント区分, 地質調査所速報, no.EQ/99/3(平成10年度活断層・古  
地震研究調査概要報告書), 151-130.

別所文吉, 1967, 山嶽の静動および環根尾断層地質構造図, 金沢大学教育学部地学  
教室, 地質彙報, 1, 364p.

岐阜県文化財保護センター, 1995, 徳山に埋もれた歴史を探る, 1995年度徳山地

- 区埋蔵文化財調査現地説明会資料, 21p.
- 林 上, 1971, 濃尾地震にともなう根尾谷断層の水平変位量—根尾村中地区の場合, 地理学評論, 44, 875-877.
- 林 唯一, 1983, 水鳥地区の根尾谷断層および濃尾地震, 岐阜女子大学地域文化研究報告, 1, 73-88.
- 井上大栄・宮腰勝義・楠 健一郎・木方建造・大山隆弘・曾根賢治・鈴木浩一・上田圭一・藤光康宏・本島 睦・本荘静光・佐竹義光, 1991, 第四紀層下に分布する断層の調査法・活動性評価法, 電力中央研究所報告, U22, 150p.
- 井関弘太郎, 1966, 濃尾地震(1891年)にみられた濃尾平野の活断層, 名古屋大学文学部研究論集(史学), 16, 231-243.
- 井関弘太郎・守屋以智雄, 1968, 根尾谷断層に関する資料, 地学雑誌, 77, 155-165.
- 金折裕司・猪原芳樹・宮腰勝義・角田隆彦・佐竹義典・日比野 敏, 1985, 上金原地区における根尾谷断層の性状(その1)予察トレンチ調査及びボーリング調査結果, 電力中央研究所土木研究所立地部, 2号印刷物, 25p.
- Kaneda, H., and A. Okada, 2008, Long-term seismic behavior of a fault involved in a multiple-fault rupture: insights from tectonic geomorphology along the Neodani fault, central Japan, Bull. Seismol. Soc. Am., 98, 2170-2190, doi: 10.1785/0120070204.
- 荻谷愛彦, 1999, 濃尾活断層系長滝断層の変位地形と最新活動, 地質調査所速報, no.EQ/99/3(平成10年度活断層・古地震研究調査概要報告書), 131-140.
- 河合正虎, 1959, 飛騨高原西部における後期中生代の地殻変動—第2報(越前・美濃山地の地質学的研究), 地質学雑誌, 65, 760-765.
- 河合正虎, 1964, 5万分の1地質図「根尾」および同地質説明書, 地質調査所, 66p.
- 小坂和夫, 1987, 美濃帯中・古生層の大規模な折れ曲がり帯とそれを変位させる“濃尾活断層系”, 地質学雑誌, 93, 369-372.
- 小藤文次郎, 1892, 濃尾大地震ノ震源, 東洋学芸雑誌, 9, 147-158.
- Koto, B., 1893, On the cause of the great earthquake in central Japan, 1891, J. Col. Sci., Imp. Univ. Jpn., 5, 295-353.
- 隈元 崇・岡田篤正・遠田晋次・上田圭一・池田安隆, 1992, 1991年濃尾活断層

- 系根尾谷断層（金原地区）トレンチ調査，活断層研究，10，85-91.
- 京都大学防災研究所，1983，濃尾地震断層系のトレンチ調査，地震予知連絡会会報，29，360-367.
- 京都大学防災研究所，1986a，1981年濃尾活断層系梅原断層（高田地区）トレンチ調査，活断層研究，3，28-32.
- 京都大学防災研究所，1986b，1981年濃尾活断層系根尾谷断層（佐野地区）トレンチ調査，活断層研究，3，33-36.
- 松田時彦，1974，1891年濃尾地震の地震断層，地震研究所研究速報，13，85-126.
- 三木晴男・渡辺 晃・島田充彦，1965，根尾断層周辺に発生する極微小地震の観測，地震2，18，103-112.
- 三雲 健・安藤雅孝，1975，濃尾地震の解析的再現，科学，45，50-58.
- Mikumo, T., and Ando, M., 1976, A search into the faulting mechanism of the 1891 great Nobi earthquake, *J. Phys. Earth*, 24, 63-87.
- 宮腰勝義・緒方正虔・角田隆彦・佐竹義典・田中和広・木方建造・猪原芳樹・金折裕司，1988，根尾谷断層の活動性—岐阜県金原における断層の分布・性状と活動様式の解析—，電力中央研究報告，U88052，1-38.
- 村松郁栄，1976，根尾谷断層と濃尾地震，地質学論集，12，117-127.
- 村松郁栄，1983，濃尾地震による濃尾平野の住家被害率分布，岐阜大学教育学部研究報告（自然科学），7，867-882.
- 村松郁栄・梶田澄雄・鈴木静枝・杉村 新，1964，水鳥断層の構造，岐阜大学学芸部研究報告，3，308-317.
- 中村新太郎・別所文吉，1933，根尾断層をめぐる地質構造，地質学雑誌，40，417-419.
- 野村倉一，1980，濃尾地震のツメ跡，教育出版文化協会，128p.
- 小川琢治，1903，濃尾地震後地形変化の測定結果（万国測地学委員会の報告），地学雑誌，15，857-859.
- 岡山俊雄，1931，美濃越前山地内部の断層地形（一），（二），地理学評論，7，920-942，1035-1062.
- 大森房吉，1894，濃尾地震概況，明治二十四年十月二十八日大震報告，48-88.
- 大森房吉，1900，明治二十四年十月二十八日濃尾大地震ノ調査（第二回報告），震

- 災予防調査会報告, 32, 67-87.
- 大森房吉, 1910, 地震ノ種類ニ就キテ, 震災予防調査会報告, 68 甲, 3-19.
- 岡田篤正, 1979, 愛知県内の活断層に関する解説, 愛知県の地質・地盤 (その 4), 愛知県防災会議地震部会, 17-21.
- 岡田篤正, 1986, 中部日本の活断層とプレート境界問題, 月刊地球, 8, 756-762.
- 岡田篤正, 1987, 濃尾地震断層系根尾谷断層 [巡検資料], 活断層研究, 4, 71-90.
- 岡田篤正・松田時彦, 1992, 根尾村水鳥および中付近における根尾谷断層の第四紀後期の活動性, 地学雑誌, 101, 19-37.
- 岡田篤正・渡辺満久・安藤雅孝・佃 為成・平野信一, 1992, 濃尾活断層系から発生した古地震の考察—梅原断層のトレンチ調査, 地学雑誌, 101, 1-18.
- 産業技術総合研究所, 2001, 温見断層のトレンチ調査 (福井県大野市温見地区), 地震予知連絡会会報, 66, 376-379.
- 佐藤比呂志・岡田篤正・松田時彦・隈元 崇, 1992, 根尾谷断層水鳥断層崖のトレンチ壁面の地質, 地学雑誌, 101, 556-572.
- 田畑茂清・原 義文・井上公夫, 1999, 濃尾地震 (1891) に起因した土砂移動の実態, 砂防学会誌, 52, 24-33.
- 辻村太郎, 1926, 日本地形誌, 古今書院, 454p.
- 津屋弘達, 1937, 水鳥の地震断層と附近の地質, 地震, 9, 398-410.
- 脇田浩二, 1991, 谷汲地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 51p.
- 脇田浩二・原山 智・鹿野和彦・三村弘二・坂本 享・広島俊男・駒澤正夫, 1992, 1:200,000 地質図幅「岐阜」, 地質調査所.
- 渡辺 晃・中村正夫, 1967, 根尾谷近傍に発生する微小地震の 2, 3 の性質, 地震, 2, 20, 106-115.
- 吉岡敏和・栗田泰夫・下川浩一・石本裕己・吉村実義・松浦一樹, 2001a, 濃尾地震断層系・温見断層の活動履歴調査, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査研究センター, No.1, 97-105.
- 吉岡敏和・荻谷愛彦・吾妻 崇・松崎達二・川崎輝雄, 2001b, 武儀川断層の活動履歴調査, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査研究センター,

No.1, 107-114.

吉岡敏和・栗田泰夫・佐々木俊法・田中竹延・柳田 誠, 2002a, 揖斐川断層の活動履歴調査, 活断層・古地震研究報告, 産業技術総合研究所地質調査総合センター, No.2, 81-89.

吉岡敏和・栗田泰夫・下川浩一・石本裕己・吉村実義・松浦一樹, 2002b, トレンチ調査に基づく 1891 年濃尾地震断層系・温見断層の活動履歴, 地震 2, 55, 301-309.

吉岡敏和・栗田泰夫・佐々木俊法・田中竹延・柳田 誠, 2003, 揖斐川断層の完新世における活動履歴—岐阜県藤橋村におけるトレンチ調査結果, 活断層研究, 23, 63-68.

#### (9) 関ヶ原断層

岐阜県, 1996, 平成 7 年度地震調査研究交付金関ヶ原断層に関する調査成果報告書, 岐阜県, 100p・216p・12p.

Huzita, K., 1962, Tectonic development of the Median Zone (Setouti) of Southwest Japan, since Miocene, *J. Geosci. Osaka City Univ.*, 6, 103-144.

藤田和夫・岸本兆方, 1972, 近畿のネオテクトニクスと地震活動, *科学*, 42, 422-430.

市川 渡, 1929, 越前城崎村地方の地形と其の発達に就いて, *地理学評論*, 5, 1058-1072.

今村明恒, 1910, 明治四十二年姉川地震調査報告, 震災予防調査会, 70, 1-63.

Imamura, A., 1928, On the topographical changes preceeding and following the Anegawa earthquake of 1909, *Proc. Imp. Acad.*, 4, VII, 373-376.

小藤文次郎, 1910, 地質学上の見地に依る江濃地震, 震災予防調査会報告, 69, 1-15.

中村新太郎, 1910, 江濃地震調査概報, *地学雑誌*, 22, 18-36.

岡山俊雄, 1956, 柳ガ瀬断層と敦賀湾伊勢湾線, *駿台史学*, 7, 75-101.

須貝俊彦・伏島祐一郎・栗田泰夫・吾妻 崇・苅谷愛彦・鈴木康弘, 1999, 養老断層の完新世後期の活動履歴—1586 年天正地震・745 年天平地震震源断層の可能性, 地質調査所速報, no.EQ/99/3 (平成 10 年度活断層・古地震研究調査概要報

告書), 89-102.

(10) 岐阜—一宮線

愛知県, 1998, 平成9年度地震関係基礎調査交付金岐阜—一宮断層帯及び養老—桑名—四日市断層帯に関する調査成果報告書, 118p.

愛知県, 2000, 平成11年度地震関係基礎調査交付金濃尾平野地下構造調査成果報告書」.

飯田汲事, 1979, 明治24年(1891年)10月28日濃尾地震の震害と震度分布, 愛知県防災会議地震部会, 304p.

飯田汲事・青木治三, 1959, 重力異常と地下構造特に濃尾平野の場合について, 測地学会誌, 5, 88-91.

井口龍太郎, 1894, 大地震後岐阜県東濃ノ地ハ殊ニ擾乱セル哉, 気象集誌, 13, 70-74.

井関弘太郎, 1966, 濃尾地震(1891年)にみられた濃尾平野の活断層, 名古屋大学文学部研究論集, 16, 231-243.

片山逸郎, 1893, 濃尾震誌, 241p.

木沢成肅・山羽義彦, 1891, 明治震災輯録, 金池堂, 174p.

桑原 徹, 1985, 濃尾平野の地下水盆, 東海三県地盤沈下調査会編, 濃尾平野の地盤沈下と地下水, 名古屋大学出版会, 35-76.

桑原 徹・松井和夫・吉野道彦・高田康秀, 1972, 伊勢湾と周辺地域の埋没地形と第四系—“沖積層”細分と伊勢湾の新しい沈降盆地化の問題—, 地質学論集, 7, 61-76.

杉崎隆一・柴田 賢, 1961, 地下水の地球化学的研究(第一報)—濃尾平野の地下構造と帯水層の分布—, 地質学雑誌, 67, 335-345.

杉崎隆一・柴田 賢, 2003, 岐阜—一宮断層の再評価—平野部における断層の認定についての問題点—, 地震2, 56, 281-296.

測量・地図百年史編集委員会, 1970, 測量・地図百年史, 日本測量協会, 673p.

松澤 勲・桑原 徹, 1964, 濃尾平野の地下構造とその構成, 伊勢湾台風災害の調査研究報告, 名古屋大学災害科学調査会, 14-39及び付図.



- 松田時彦, 1974, 1891年濃尾地震の地震断層, 地震研究所研究速報, 13, 85-126.
- Mikumo, T., and Ando, M., 1976, A search into the faulting mechanism of the 1891 great Nobi earthquake, *J. Phys. Earth*, 24, 63-87.
- 村松郁栄, 1963, 濃尾地震激震域の震度分布および地殻変動, 岐阜大学学芸学部研究報告(自然科学), 3, 2, 202-224.
- Sato, H., 1973, A study of horizontal movement of the earth crust associated with destructive earthquakes in Japan, *Bull. Geogr. Surv. Inst.*, 19, 89-130.

(11) 養老断層

- 愛知県, 2000, 濃尾平野の地下構造調査, 第1回堆積平野地下構造調査成果報告会予稿集, 61-70.
- 栗田泰夫・吉田史郎, 1991, 桑名断層および四日市断層の完新世における活動, 活断層研究, 9, 61-68.
- 飯田波事, 1980, 天正地震(1586)・明応地震(1498)の地震と津波災害について, 自然災害史料解析, 7, 170-182.
- 貝塚爽平, 1950, 桑名市西部の断層地形, 地理学評論, 22, 352-356.
- Kanamori, H., 1977, The energy release in great earthquakes, *J. Geophys. Res.*, 82, 2981-2987.
- 桑原 徹・松井和夫・吉野道彦・高田康秀, 1972, 伊勢湾と周辺地域の埋没地形と第四系, 地質学論集, 7, 61-76.
- 森 勇一・海津正倫・鬼頭 剛・川瀬久美子, 1996, 三重県桑名断層に伴う活構造についての一考察, 活断層研究, 15, 17-22.
- 須貝俊彦・栗田泰夫・下川浩一, 1998, 桑名断層・四日市断層の活動履歴調査, 地質調査所速報, EQ/98/1, 75-90.
- 須貝俊彦・栗田泰夫・下川浩一, 1999a, 三重県・桑名断層及び四日市断層の活動履歴調査, 地震予知連絡会会報, 61, 455-460.
- 須貝俊彦・伏島祐一郎・栗田泰夫・吾妻 崇・荻谷愛彦・鈴木康弘, 1999b, 養老断層の完新世後期の活動履歴—1596年天正地震・745年天平地震震源断層の可能性, 地質調査所速報, EQ/99/3, 89-102.

須貝俊彦・杉山雄一，1998，大深度反射法地震探査による濃尾平野の活構造調査，  
地質調査所速報，EQ/98/1，55-65.

須貝俊彦・杉山雄一，1999，深層ボーリング（GS-NB-1）と大深度地震探査に基  
づく濃尾傾動盆地の沈降・傾動速度の総合評価，地質調査所速報，EQ/99/3，77-87.